ISSN 2432-9347

child science

チャイルドサイエンス

2020年3月

子ども学 Vol.19

「日本子ども学会」がめざすもの

設立趣意

子どもは、私たち大人が適切な育児・保育・教育を保障しなければ、その身体の成長も心の発達も損なわれる危険にさらされています。子どもとは、常に Children at risk（危機にある子どもたち）なのです。

その危険性を取り除くには、子どものことを考え、子どもの立場に立って、子どもの生活環境の中にあるすべてのモノやコトをデザインする Child-Caring Design（成育デザイン。以下 CCD と記します）が必須です。この CCD を作り出すためには、子どもに関係する人々が、学者、実践家（保育士、教師など）ばかりでなく、親までも含めて話し合い、その成果を関係する学問の研究（studies あるいは research）で発展・深化させ、包括的、統合的に話し合う必要があります。その基盤となる学際的あるいは環学的な学問体系を、私は「子ども学 Child Science」と呼んでいます。

人間にかかわる科学は 20 世紀に大きく進歩しましたが、デカルト主義的な方法論、すなわち要素還元主義 (reductionism) だけでは人間を科学的に解明できないことは、誰もが認めるところです。そこに登場したのが、人間にかかわる自然科学や人文科学を包括し、統合した新しい学際的、環学的な人間科学（human science）です。そして、人間の形成期を対象とする「子ども学」は子どもの人間科学であり、人間科学そのものの中核をなすものと言えます。

日本子ども学会（Japanese Society of Child Science）は、CCD の学際的、環学的な話し合いの場であり、人間科学としての「子ども学」を体系づける場でもあります。2003 年に設立された日本子ども学会が、21 世紀の歩みとともに発展し、未来を担う子どもたちの幸せのために、大きく寄与することを願ってやみません。

日本子ども学会 創設者

小林　登

child science

contents 目次

【惜別】

2 **日本子ども学会創設者　小林登先生を悼んで**

【子ども研究】

7 インタビュー **「幼児がどんなアートに心ひかれるのかを、大人が先回りして決めてしまわない方がいい」**
杉浦幸子さん（武蔵野美術大学芸術文化学科教授）

15 トピック 人物紹介　**岩本悠さん**（島根県教育魅力化特命官）
木下　真（日本子ども学会事務局長）

【日本子ども学会　学術集会　第16回「子ども学会議」報告】

17 **「第16回子ども学会議」を終えて　報告と御礼**
友だちってなんだ？ ー家族・学校・メディアからみる子ども同士の世界ー
大会長：**酒井　厚**（首都大学東京人文社会学部准教授）

20 基調講演　**「友だち関係を科学する** ー発達心理学からの視点ー**」**
酒井　厚（首都大学東京 人文社会学部准教授）

21 講演　**「子どもをめぐる学問のつながり」**
榊原洋一（日本子ども学会理事長、お茶の水女子大学名誉教授）

22 シンポジウムI　**「家族から看る子ども同士の世界」**
安藤寿康（慶應義塾大学教授）

23 シンポジウムII（市民公開講座）　**「学校から見る子ども同士の世界」**
眞榮城和美（白百合女子大学人間総合学部 発達心理学科准教授）

24 シンポジウムIII（市民公開講座）　**「メディアから視る子ども同士の世界」**
酒井　厚（首都大学東京 人文社会学部准教授）

25 ラウンドテーブル1　**「日本のインクルーシブ教育は本当にインクルーシブか?」**
榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授、CRN所長）

26 ラウンドテーブル2　**「令和新時代における保育者・教師（養成）と子どもとの関係づくり」**
田中卓也（静岡産業大学）

27 ラウンドテーブル3　**「アクティブ・ラーニングを支える脳を知り、子どもの学びと成長に活かそう!」**
仁木和久（お茶の水女子大学 人間発達教育科学研究所）

28 ラウンドテーブル4　**「就学前期のメディア接触と子どもの発達」**
菅原ますみ（お茶の水女子大学基幹研究院）

28 ラウンドテーブル5　**「少年非行とセカンドチャンス** ー少年院の出院者に話を聞くー**」**
木下　真（福祉ジャーナリスト、日本子ども学会事務局長）

30 **ポスターセッション**

【投稿論文】

33 **障害のある幼児のメディア活用** ー自閉症児へのコミュニケーションアプリの使用の試みー
榊原洋一（お茶の水女子大学）、**堀田博史**（園田学園女子大学）

39 **3歳未満時での母親の就業** ー養育態度を媒介した子どもの行動特徴との関連ー
菅原ますみ（お茶の水女子大学）、**松本聡子**（お茶の水女子大学）、
酒井　厚（首都大学東京）、**高岡純子**（ベネッセ教育総合研究所）、
持田聖子（ベネッセ教育総合研究所）、**後藤憲子**（福武財団）

【子ども学会NEWS】

45 **第17回 子ども学会議（学術集会）のお知らせ**

46 **投稿論文部門　原稿募集について**

47 **事務局だより・委員会だより**

48 **役員・理事紹介**

日本子ども学会創設者
惜別 小林 登先生を悼んで

2019年12月26日、日本子ども学会を創設された小林登先生が逝去されました。
ここに謹んで哀悼の意を表し、心より御礼を申し上げます。

〈プロフィール〉
小林　登（Kobayashi Noboru）
（1927 年 11 月 23 日–2019 年 12 月 26 日）。日本子ども学会創設者。医学者、小児科医、医学博士。東京生まれ。1954 年、東京大学医学部医学科卒業。米英留学。東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。東京大学名誉教授、日本子ども学会名誉理事長、チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）名誉所長、国立小児病院名誉院長、日本赤ちゃん学会名誉理事長、日本母乳保育学会名誉理事長、日本子ども虐待防止学会名誉会長。
小児医学専門書以外の主な著作に『ヒューマンサイエンス』（中山書店）、『子どもは未来である』（メディアサイエンス社）、『育つ育てるふれあいの子育て』（風濤社）、『風韻怎思－子どものいのちを見つめて』（小学館）、『子ども学のまなざし』（明石書店）ほか多数。受賞歴に日本医師会最高優秀功労賞（1984 年 11 月）、毎日出版文化賞（1985 年 10 月）、国際小児科学会賞（1986 年 7 月）、勲二等瑞宝章（2001 年秋）、武見記念賞（2003 年 12 月）など。

追悼 小林登先生

日本子ども学会理事長　**榊原洋一**

昨年末、小林登先生は 92 歳の天寿を全うされ、安らかに永眠されました。

小林登先生の成し遂げられたことは、あまりにも多く、そのご紹介だけで紙数が尽きてしまいますが、子ども学会会員の中にはあまりご存じない方もおられると思いますので、最初に手短にご経歴をご紹介し、ついで子ども学を含めた幅広いご活動について、そして最後に僭越ながら私の個人的な思い出について書かせていただき、小林登先生への追悼文としたいと思います。

小林登先生は、海軍兵学校在学時に終戦を迎え、その後に東京大学医学部に進学するという特異な経歴をお持ちです。海軍兵学校は、当時の優秀な子弟が通う学校で、産婦人科の坂元正一氏や哲学者の木田元氏も海軍兵学校出身です。広島に原子爆弾が投下された時に、先生は江田島で修練中でした。被爆後間もない広島の町を通って、下級生を引き連れて東京に戻られたときのお話をお聞きしたことがあります。

東京大学医学部をご卒業後、小児科学教室に入局してしばらくして、当時はまだ珍しかった海外での研修をめざし、アメリカのシンシナチで小児科研修を受けられます。戦後アメリカへの留学はまだ珍しく、大勢の医学部同級生が留学希望者として登録したものの、いざ実際に留学するという時に将来の不安等で辞退者が続出し、結局、小林先生ともう１人だけが実際に留学を果たしたそうです。若き小林先生に、すでに進取の精神が顕われていたエピソードだと思います。また、その後、今度はイギリス・ロンドンのグレートオーモンドストリートにある小児病院で研修を継続されます。世界の医学の中心がドイツから英米に移行するなかで、最先端の臨床医学を実践されたことになります。

東京大学小児科に戻られると、当時、最年少で小児科教授に就任され、さらに国際小児科学会会長にも推挙され、世界の小児科学を率いられてきました。また、国

内では大平内閣のブレインとして、臨時教育審議会委員や中央薬事審議会委員等もつとめられています。東京大学小児科学教授を定年を待たずに辞められ、国立小児病院の院長に就任された後も、日本でまだ珍しかった子どものための院内学級の設置や長期入院児の親のための宿泊施設（マクドナルドハウス）の開設など、子どもたちのためのグローバルな活動を展開されます。

小林登先生はその豊富なご経験に裏打ちされた先見的なお考えを、多数の著書などを通じて社会に発信されていますが、その集大成として創設されたのが日本子ども学会です。日本子ども学会のスローガンとして有名な「子どもは未来である」という視点は、現在にも残る子どもに対する大人社会からの父権主義的な視点への鋭いアンチテーゼになっていると思います。

世界の子どもに目を向けると、病気だけでなく、貧困や飢餓など、日本では必ずしも大きな問題にはなっていない困難があることを知っておられた小林先生は、小児科医の狭い守備範囲を大きく超え、障害を持つ子どもや、被虐待児に目を向けられました。難病のこども支援全国ネットワークの設立や、子どもの虐待の情報センター長（子どもの虹情報研修センター）就任など、休むことなく子どものために邁進されました。いまだ実現されていませんが、政府機関として「子ども省」を作るべきだとも主張されていました。また、最近になって世界中で主張されるようになった持続可能な開発目標（SDGs）を先取りされており、エコロジーの視点から子どものことを考えるべきだ、という視点を早くから持っておられました。

こうした小林先生の先見性には、ただただ驚くばかりで、もしかして未来を見ることのできる超能力を持っておられたのではないか、と思えるほどです。

当時は社会的な認知が進んでいなかったインターネットの有用性にもいち早く気付かれ、子どもに関する情報を世界に発信し、学際的な情報交流の場としてチャイルド・リサーチ・ネット（CRN）を創設されたのも、小林先生の進取の精神の発露だったといってよいでしょう。その活動の一環として、中国の幼児教育専門家との共同で中国・日本で交互にカンファレンスを行い、自由な意見交換を行う場として東アジア子ども学プログラムを始められました。このプログラムは現在チャイルド・リサーチ・ネットワーク・アジア（CRNA）として、東南アジアに舞台を広げて続いています。

昨年、現役を退き悠々自適の生活を送っておられる先生をお訪ねしましたが、これだけのことを成し遂げられながら、「ぼくは何か少しでも世の中に役立つことをしたかね?」と言われました。小林先生の気取らぬ姿勢に感銘を受けました。

私が小林先生にお目にかかったのは、医学部での小児科学の講義が最初だったと思います。まだドイツ医学のやや堅苦しい系統的な講義が多かった中で、小林先生の講義は、まったく雰囲気が違っていました。まずご自身が概論を述べた後に、小児科学教室の若手の医師が詳細について講義をするという民主的な印象の講義でした。また国際的な人脈を生かして、霊長類研究の世界的な研究者であるジェーン・グドール博士や、ウイルス研究でノーベル賞をとったガジュセック教授などが登壇するという豪華な内容でした。その当時の私の小林先生の印象は、変な言い方ですが「小林登先生の頭上には青空が広がっている」でした。

小林先生の魅力に引かれて小児科学教室に入局しましたが、私が受け持った珍しい免疫不全の患者さんについて学生に講義をする機会を与えられ、必死で勉強したことも思い出します。ただあまりの緊張のために、講義自体の記憶はまったくありません。

小林先生のご専門は、当時急速に発展していた免疫学です。免疫不全の患者さんの件もあり、一年間の研修が終わって地方病院に出向する前に、教授室に呼ばれ、月一回の研究日には自分の免疫の外来を見学するように、と有り難いお誘いもいただきました。ところが私は神経学を専門とすることを決めており、そのお申し出をお断りしてしまいました。本当に不肖の弟子だったと思います。それにも関わらず、小林先生は決して私を叱ることなく、しばらくして小児神経学研究のためにアメリカのワシントン大学への留学を決めた時も、ワシントン大学の有名な研究者の論文を紹介してくださったりしました。そして、その後もこの不肖の私を、子ども学会やCRNに誘ってくださったのです。

私には神様の存在は理解できませんが、幼少時から親から聞かされてきた、どこかで「お天道様が見ている」という言葉はなんとなく信じてきました。しかし、今となって分かったことは、私にとってお天道様は小林登先生であったということです。

小林登先生のご冥福をお祈りいたします。

医学を超えて

日本子ども学会事務局長　**木下　真**

小林登先生は生前多くの著作を書かれています。小児医学の専門書から家庭の医学のような一般向けのもの、さらにエッセイにいたるまで、そして晩年は子ども学を集大成するような著作が多くなっていきました。ほとんどに目を通していますが、もしも、私が数ある著作の中で、一番のお気に入りを上げるとしたら、1980 年に朝日出版社から発刊された『〈私〉のトポグラフィー　自己−非自己の免疫学』になります。小林先生が 53 歳のときに上梓されたもので、出版時、私はまだ文学部の学生に過ぎず、この本のことはもちろん、小林先生のことも存じ上げませんでした。

この本を意識するようになったのは、４年後に、「現代思想」という雑誌で、小林先生が文芸評論家の柄谷行人氏と、この著作をめぐって対談することになった時です。その対談はあまり話がかみ合っておらず、盛り上がりに欠けるものでしたが、両者は免疫というシステムに、近代とは異なる人間観を見ているところで一致していました。

とくに異物を攻撃するはずの免疫システムが自己を攻撃し始めるアレルギー現象を現代社会のカタストロフィーにつなげたり、病気の原因を外部ではなく内部に求めるようになった視点の変化を、近代人の内面の発生へとつなげる二人の洞察はスリリングでした。免疫が、哲学的にもおもしろいテーマらしいと気づかされるとともに、小林登という名前についてもぼんやりと意識するようになりました。その時点では、私にとっては、小林先生は子ども学の提唱者である前に免疫学者でした。

『〈私〉のトポグラフィー　自己−非自己の免疫学』が好きなのは、小林先生が医学者の枠を超えた研究者であったことが、端的に表れているからです。医師というのは、現代では病気を治す職業人になっていますが、もともと古代や中世においては、人間とは何かを探求する哲学者でした。この著者の小林登には、その風情が漂っています。

小林先生は、この著作の中では、病気とは直接関係のない根源的な問題についても洞察を深めています。生物はなぜ自分を食べてしまわないのか。免疫が保とうとする自己とは何か、排除しようとする非自己とは何か。なぜ私は私でないものになってしまわないのか。自己のインテグリティ（完全性、恒常性）を保つ機能についての考察は、宗教や芸術にまで及び、さらに生物学的概念と哲学的な人間観とのズレを明らかにしたいという野心的な思いにまで至っています。

推測に過ぎませんが、多分この頃、小林先生は研究者として脂ののった、最も勢いのあった時代なのではないでしょうか。人類の秘密の一端に手が触れたという興奮が伝わってきて、みずみずしい知性の躍動が感じられます。人間とは何なのか、その謎を解き明かしたいという思いは、そのまま異分野の研究者を集めてスタートした、その後の子ども学研究会や日本子ども学会にも貫かれていったのだと思います。

小林先生は、医学というのは、病気を治す医師のためだけにあるのではなく、もっと多くの人間が共有すべき、豊かで、わくわくする学問であるということを伝えたかったのではないでしょうか。この著書には、「子ども学」というワードはまったく出てきませんが、小林先生が求めていた子ども学の原点がここにあるような気がしてなりません。

小林先生から直接何かを学ぶことはもうできませんが、先生が生前にお書きになった文章と向き合うと、気の利いたことを思いついた時にニヤリとされるあの笑顔がすぐに思い出されます。これからはご著書を紐解くことで、先生と再会できればと思っています。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

ロンドン留学時代の小林登先生。

「小林登先生 ご逝去に寄せて」

浅田　稔（大阪大学先導的学際研究機構）

■同じ年に日本子ども学会と赤ちゃん学会の重鎮、小林登先生と小西行郎先生のお二人が亡くなられたことは、誠に悲しく、同時に非常に大きな痛手です。小林先生は赤ちゃん学会、続いて日本子ども学会の創設に偉大な貢献をされ、ともに初代理事長を務められました。私が知る限り、この二つの学会は、若干スコープに差はあるものの、最も学際的かつ社会一般の方々が参加できる真に開かれた学会であり、複雑混迷化した現代社会に最も必要とされる学会です。

小林先生の遺志を継ぐとともに新たな価値創造を目指して頑張っていく決意です。

安倍嘉人（弁護士、公益社団法人家庭問題情報センター理事長）

■小林登先生に初めてお会いしたのは、先生が子どもの虹情報研修センター長をされていたときに、横浜家裁の所長として、家裁の運営について有識者のご意見を聞く家裁委員会の委員をお願いに行ったときです。先生は子どものことをトータルに考えるため日本子ども学会を立ち上げたと熱っぽく語りはじめ、話に引き込まれていると、「安倍所長が日本子ども学会に入ったら、うちの部長を出す」と言われました。先生の熱意に打たれ、あっという間に話がまとまりました。

以来、日本子ども学会で多くのことを学んでいますが、先生に感謝で一杯です。安らかにおやすみください。

安藤寿康（慶應義塾大学文学部教授）

■小林登先生とのご縁は、思い返せば迷える大学院生時代に読んだ、先生の編纂した『ヒューマンサイエンス』（中山書店）でした。そのスケールに、日本にもこんなすごい人がいると感銘。それは、教育を遺伝と進化から捉える今の私のアプローチを方向づけるきっかけでした。

約15年後、子ども学会の前身の研究会で初めて小林先生にお目にかかり、研究発表をいたしました。既存の学会に居心地の悪さを感じてきた私は、ようやく居場所を得た思いでしたが、実はキャリアの初めから先生に導かれていたのでした。この学恩に感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

一見真理子
（国立教育政策研究所国際研究・協力部、幼児教育研究センター）

■80年代半ば、小林先生が『新しい子ども学』で原ひろ子・宮澤康人の両先生と語り合う「子ども学のデザイン」と題する座談から、院生だった私は深い影響を受けました。その小林先生が目黒の国研のアジア教育研究室の若手室員だった私をひょっこりと訪ねて来られたのは、確かミレニアムの頃でした。「学際的な学会を作ろうとしています。ついては「子ども学」は中国語ではどういえばいい？あなたの意見を聞かせてほしい」とおっしゃいました。

どきどきしながら知識を総動員して「児童科学」（Child Science）の原点に立ち会った貴重な思い出、先生のご温顔とともに忘れません。

一色伸夫（子どもメディア研究所所長）

■〝子どもは未来である〟という言葉は、いつ聞いても私の心に沁み入ります。NHK時代に、子どもに関する数多くの番組（NHK特集　赤ちゃん～胎内からの出発～他）を企画・制作するなかで、この言葉を述べられている小林登先生との出会いがありました。 2006年4月甲南女子大学に、総合子ども学科が新しく設立され、教員として着任しました。この学科の前身は、1988年に日本で初めて開設された「国際子ども学研究センター」で、その初代の所長が当時、日本子ども学会理事長の小林登先生でした。 子ども学についての先生のお考えは、2011年出版『子ども学』（企画編集：甲南女子大学　国際子ども学研究センター）の中で、先生のプレゼンターなどとしてのお話でも知ることができましょう。

先生のアドバイスを得て、ブラゼルトン博士たちから多くを学び、「日本子ども学会」の設立にも参加し、現在に至るまで長きにわたり様々な人々とともに“子ども“に関われた私の今あるのは、小林登先生のおかげであると感謝しています。

上田信行（同志社女子大学 現代こども学科特任教授）

■小林先生との思い出の一つに、1999年に実施させていただいた「PLAYFUL」というワークショップがあります。先生から「2年に1回、CRNで国際シンポジウムをやっているのだが、次の面白い企画は何かないかね？」と聞かれたので、間髪をいれずに「会議ではなくて、ワークショップにしましょう！」と叫びました。この提案には、ベ

ネッセのみなさんも、半分ドキドキ（不安）、半分ワクワク（挑戦）でプロジェクトが始まりました。こんな過激な提案にも、にこにこしながら「まかしたから、たのむよー！！！」とやさしく見守ってくださっていたのが今も目に焼き付いています。

先生のチャレンジスピリット、大切にしていきます。

牛島廣治（東京大学名誉教授、日本母乳哺育学会元理事長）

■小林先生と私の縁は、私が東京大学医学部小児科教室に入局したことに始まります。小児の免疫の発達や母乳中などの分泌型 IgA が明らかになってきた時です。また、先天性免疫不全症候群の病態が少しずつ明らかになり始めていました。小林登先生は教授となられていて非常にご多忙でいらっしゃいましたが、時々、私たちにこうしたらうまくいくのではないかとお言葉をかけてくださいました。ハバロフスクの小児科教授から小林先生が招待された時に、私も一緒に 2 人だけの旅をしたこと、また私が母乳哺育学会の運営を任された後も、お元気な時は学術集会に参加されて一緒に楽しんだことが思い出されます。日本母乳哺育学会の目的は定款にあるように母乳哺育を科学することでしたが、次第に社会学的研究、支援が加わってきました。これも先生のお気持ちがそうさせたと思います。

先生が設立された諸学会が、さらに発展していくのを見守ってください。心より Koby 先生（愛称）のご冥福をお祈り申し上げます。

内田伸子（IPU･環太平洋大学教授、お茶の水女子大学名誉教授）

■小林登先生と知り合ったのは今から 31 年前、ベネッセ（当時；福武書店）の福武總一郎氏が開催した「子ども学勉強会（小林先生、石井威望先生、箕浦康子先生、故東洋先生と私の５名）」の席でした。小林先生のその該博な知識と人間愛に裏打ちされた真摯なことばから、私は、〝子どもは文化社会の宝である。その人たちの成長に私たちがいくらコストを払っても、その人たちの成長によってもたさされる私たち文化社会への賜物はコストを帳消して余りあるものであるに違いない〟と思うようになりました。小林先生が照らしてくださった子どもの文化財を創る道を、心込めて丁寧に歩み続けることで、小林登先生の薫陶に報いて参りたいと思います。

衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

太田美代（一般社団法人環境政策対話理事）

■小林登先生とは、日本子ども学会設立前からですので結構長いお付き合いなのですが、個人的なお話をしたのは一度だけでした。当時私は防災教育に携わっていて、いわば異分野からの闖入者だったからでしょう。「あなたのことを教えて」とお呼びになったのです。そして、先生の質問、合槌、巧みなお世辞とうなづきに促されて、気づけば小一時間。小児科の名医は、プロの聞き手でした。

今は天国で、たくさんの子どもたちの話を聞いてくださっているのでしょうか。

長田有子（チャイルドケアリングアソシエーション代表理事）

■小林先生にお会いしなかったら私は療育の仕事をしていなかったと思います。先生はどの人にも優しく、丁寧に、平等にお話しくださいました。先生からは子ども学の発達過程の観点から、また被虐待児の観点からの、療育方法と障害児教育の方法を教えていただきました。これからも子ども学の療育を広くお伝えできるように頑張っていきます。その事により、少しでも恩返しとさせていただきたいと思います。

先生は永遠に私の心の中に生きています。本当に有難うございました。

河合優年（武庫川女子大学 子ども発達科学研究センター教授）

■小林先生、長い間ご指導いただきありがとうございました。先生とは、日本子ども学会だけでなく、文部科学省の会議でもご一緒することが多く、子どもを対象とした政策への提言をされるときの、厳としたお姿を何度か見ることがありました。子どもの未来に対する思いが込められていたようにも思います。

先生が考えられていた、幸福な子どもたちの姿を具現化するように、これからも努力してまいります。これまでのご指導に感謝するとともに、先生のご冥福をお祈りいたします。

木下　真（福祉ジャーナリスト）

■小林登先生は好奇心の人でした。東日本大震災の時に帰宅困難者となって、中野サンプラザで緊急用の毛布にくるまって一緒に一晩をあかすことになると、「こんなことって、あるんだね」と、少年のように興奮されたご様子だったことを思い出します。

専門性にとらわれない、学際的な子ども研究は時代の

要請ではありましたが、小林先生の資質とも大きくかかわっていたと思います。初めての出来事である「死」を前にして、どんなことを思われたのか。叶わないことながら、ぜひお聞きしてみたいものです。

小林美由紀（白梅学園大学 子ども学部教授）

■ダンデイでスマートな小林登先生に初めてお会いした大学での授業で、小児科という学問の真髄を伝えてくださったことが、私が小児科に進むきっかけとなりました。入院患者のカンファレンスでは、ご専門の分野以外でも鋭い質問をされていたのが記憶に残っています。

一方で入院している子どもたちやご家族との毎週の昼食会では、同じテーブルでご一緒される優しい姿を垣間見ることがあり、子どもたちの未来をいつも見据えていた姿が印象的でした。先生が築かれた「子ども学」の志をこれからも大切に育てていきたいと思います。

沢井佳子（チャイルド・ラボ所長）

■夜明け前の富士の高嶺が、いち早く「あしたの光」に輝くように、小林登先生は子どもを通して未来と希望をお示しくださいました。1988 年、大学院の集中講義でお話し下さった「子どもの未来」の課題の予想は、2020 年には現実化しています。

「海洋生物学が好き」とおっしゃった先生が、タコからヒトの中枢神経までを論じた J.Z.Young と同様、地球生命史と人類思想史を見渡し、「子どもの人間科学」をご発案になった経緯を思いますと、今後も先生の「先見性」の頂きを仰いで、富士の裾野のように広大な領域の仲間を増やし、子ども学の山に石を積み続けたいと願うのです。

志村洋子（埼玉大学名誉教授）

■小林登先生、これまでいただきましたご指導に感謝いたします。ご訃報を伺い、小林先生の国立小児医療研究センターの研究室にはじめて伺った日のことを思い出しました。先生は優しい笑顔で迎えてくださり、乳児の音声解析を中心とした共同研究の検討が始まりました。この研究は、助手をされていた水上啓子先生と当時の国際小児科学会長のチェッターストローム先生を介して、ストックホルム大学での音声研究に結び付くのですが、グローバルな視点の重要さを知る有難い機会でした。

そして先生の歌声も。「子守歌」を啓蒙する番組で、コンサートホールの舞台に並んでご一緒に歌いました。先生の優しいこわね声音のびやかな歌声を今も大事に胸にしまっています。

菅原ますみ（お茶の水女子大学　基幹研究院人間科学系教授）

■小林先生のご著書を初めて拝読したのは、1984 年発刊の『ヒューマンサイエンス』（全5巻、中山書店）でございました。院生だった私の人生の目標は、このとき、「人間発達の研究を続けて、小林先生のようにエビデンスをもとに子どもの幸せを守れる人になろう!」と、とてもきっぱりと決まったことを鮮やかに記憶しています。

36 年の月日が立ってしまい、目標への道は未だはるか彼方ですが、先生が遺してくださったたくさんの道しるべを頼りに、この先も歩んで参ります。生前のご指導に深く感謝致しますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

高塩純一（びわこ学園医療福祉センター草津）

■小林先生と初めてお話ししたのは、2007 年、まだ神田に CRN があった時でした。当時、『ベビーサイエンス』に投稿した論文を英語版で掲載するため CRN を訪ね、小林先生と障害のある子どもたちの話で白熱していた時、突然、先生から「高塩君、きみが思っていることを CRN のコラムで書いてみなさい」と言われ、「琵琶湖から吹く風」を執筆することになりました。

あの時、先生から後押しをいただかなかったら、今もまだ、混沌とした世界を彷徨いながら子どもたちのセラピーを行っていたと思います。

先生からいただいた言葉を胸に、第 17 回子ども学会議を開催します。どうか天国から見守っていてください。

おしゃれで、いつもダンディだった小林先生。

所 真里子（元 チャイルド・リサーチ・ネット研究員）

■小林登先生と初めてお会いしたのは、20 世紀最後の年でした。Friedman 博士初来日の国際シンポジウム、日本子ども学会の設立、CRN 中国語版の開設、大江健三郎氏を招いての国際シンポジウム……。次から次へと湧き出る小林先生の「子ども学」への想いを、必死に追いかけた 7 年間でした。異動辞令が出たとき、先生は「まさにチャイルド・ケアリング・デザインの部署ではないか、頑張りなさい」と激励してくださり、その後、私が「子どもの安全」に取り組むきっかけとなりました。

「21 世紀こそ子どもの世紀に」。先生が何度も記された言葉です。先生の想いは、忘れず引き継いでいきます。

中井昭夫（武庫川女子大学 子ども発達科学研究センター教授）

■小西先生に続いて、とても大きく、とても大切な方を失い、言葉もありません。

小林登先生は、私が 2015 年に第 12 回日本子ども学会学術集会の大会長をさせていただいた際、大会長講演の座長の労をとって下さったばかりか、第 3 回の稲垣由子先生以来、久々に小児科医が大会長を務め、また参加人数も過去最高、プログラムも充実していたことなど、大変喜んでいただき「よい学会です。ご盛会おめでとう！」と何度も握手してくださいました。新設地方単科医大出身の一介の小児科医である私のような者にとって雲の上の人と思っていた憧れの先生にそのようなお言葉をかけていただき、夢のような気持ちで、大変感激したことは忘れられません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

仁木和久（産業技術総合研究所客員研究員）

■子どもの可能性に目をむけ・育てる「子ども学」を、深い洞察にもとづき提唱され、その実践を目指す集いの場「日本子ども学会」を創設された小林登先生。

先生との出会いは、私の脳イメージング研究が「脳科学と教育」に採択され、教育と脳科学の架橋研究のあり方を模索している時でした。「子ども学会に入ったらいいよ」とのお誘いで、先生の「子どもはインフォメーション・シーカー」に共感しつつ、学校教育でなぜそのアクティブさが失われるのかの問題意識に駆動され、今「アクティブ・ラーニングの脳科学」に挑戦できているのは、先生のおかげと思います。小林先生のこれまでのお導き、本当にありがとうございました。

開　一夫（東京大学大学院総合文化研究科教授）

■小林先生のような偉大な方とお目にかかれたことは、僕の科学者としてのコンパスとなっております。自分が今なにをすべきかを考える時には、小林先生のお顔を思い浮かべます。神保町の中華料理屋では、戦後のこと、原爆被害者のことをお話くださいました。医師としての先生のご活躍もさることながら、赤ちゃんを観る科学者（あるいは理家?）としての先生のお考えは、今でも僕の心の中に活きています。

「Information Seeker として乳児 を捉える」というアイデアは、現在の乳児研究においてもっとも大切なことだと思います。

福澤（岸）利江子

（筑波大学医学医療系助教 CRN ドゥーラ研究室担当）

■小林先生は「ドゥーラ」という、産婦に寄り添う女性を指す概念を日本に初めて紹介されました。40 年余が経ち、日本でもドゥーラが認知されてきました。私は先生の「誰でもドゥーラになれる」というお言葉を胸に、ドゥーラを職業としてではなく概念として追求するという目標に辿り着きました。15 年前、米国留学中に途方に暮れていた頃、先生が CRN 内に「ドゥーラ研究室」を作ってくださり、そのおかげで今の自分があります。

何の関係もなかった私にも、温かく道を開いてくださった小林先生。先生へのご恩は今後出会う方たちへお返しする所存です。

箕浦康子（お茶の水女子大学名誉教授）

■私が小林先生に初めてお目にかかりましたのは、1987 年に東京で開かれた 国際行動発達学会の Japanese Research Highlight のセッションでした。そこで Quantitative Evaluation of Infant Behavior のご発表での石井先生と開発された斬新な研究手法に感銘を受けました。1993 年に上京しましてからは、先生の御推薦で、ベネッセが事務局を担当していた子ども学研究会、放送文化基金ほかのサポートを受けた研究会（成果は、『情報革命の光と影：カルチュラルエコロジーの視点から』）に参加させていただきました。

先生の期待に応える仕事ができていたかは心もとない限りですが、自分の専門分野以外へ視野を広げてくださったことには大変感謝しております。

宮下孝広（(白百合女子大学人間総合学部教授・副学長）

■日本子ども学会の設立総会を含む「第0回子ども学会議」を、小林登先生のご配慮で白百合女子大学で開催させていただいたのは、たいへん光栄なことでした。その時、先生が宣言された設立の趣旨は『チャイルド・サイエンス』誌の巻頭に掲げられている通りですが、先生の、「学際的・環学的」な研究の基盤の上に、子どもに関係する人々として実践家や親までをも含めてチャイルド・ケアリング・デザインを創り出そうという発想の先見性には、未だに敬服するばかりです。先生が指し示してくださったこの道を歩み続けていきたいと思います。

劉　愛萍（Child Research Net 主任研究員）

■先生が設立されたチャイルド・リサーチ・ネット（ＣＲＮ）に私が参加したのは 2004 年の秋でした。2005 年には中国語版のホームページが誕生。さらに「東アジア子ども学交流プログラム」（計 10 回、日中の間で学術交流会議を行いました）を立ち上げ、毎年、中国各地の大学で研究者や幼児教育現場の教師、大学生と交流を行いました。これは「日本は課題先進国なので、日本で起きたことは東アジア諸国も起こりえる。早めに課題を共有し、日本の教訓を伝えるべきだ」という先生の考えのもとに進めた事業の一つでした。

小林先生は「21 世紀こそ子どもの世紀に」と、よくおしゃっていました。「小医治病、中医治人、大医治国」という中国語のことわざがあります。尊敬する小林登先生はまさに「大医」でした。

渡部　茂（明海大学保健医療学部 口腔保健学科教授）

■小林登先生、ありがとうございました。子どもの医療、子どもの幸せのために一生を捧げられ小林登先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。先生が提唱された〝Human Science〟子ども学、「子どもは生物学的存在として生まれ、社会学的存在として育つ。子どもを育てる科学は諸科学を広く統合した文理融合科学でなければならない。」は、子ども世界、そして日本を構築する礎としていつまでもしっかりと受け継がれていくことでしょう。

2010 年第7回日本子ども学会議を開催させていただきましたこと、先生の息吹に触れることができましたこと、無上の喜びでした。感謝の気持ちと共に謹んで哀悼の意を表します。

渡辺富夫（岡山県立大学情報工学部教授・副学長）

■大学院生時代の母子間コミュニケーション研究会で、小林先生が「赤ちゃんはお母さんの語りかけに対して何十万回、何百万回とリズムを合わせて引き込むことで、言葉という文化を獲得している」と話されたことに強く感銘したことを今も鮮やかに覚えています。それ以来、人をつなぐ身体的引き込みの不思議さ・重要性に魅了され、40 年にわたり温かい眼差しでご指導いただきました。

いつも先生の笑顔とお言葉に勇気づけられ、大いに励まされました。誠にありがとうございました。小林先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）スタッフ一同

■小林先生を頭に思い描こうとすると、いつも柔らかな笑みをたたえたお顔が思い浮かびます。世界中の子どもたちへの慈愛に満ち溢れた小林先生には、定期的に健康体操に通うエピソードを CRN メンバーの集まる定例会で披露してくれたり、流行りのアイドルの歌に合わせ踊ってくれたりする、おちゃめな一面もありました。

チャイルド・リサーチ・ネット（CRN）は、小林先生が 1996 年に創設された、学際的・国際的な「子ども学」研究所です。「世界の子どもたちの well-being のために、子どもを取り巻く様々な問題を解決すること」を理念に据え、活動を続けてまいりました。

現在、CRN の所長は榊原洋一先生に引き継がれておりますが、創設時に小林先生が提唱された理念は今も変わらず生き続けています。世界の子どもたちの well-being のために、CRN 一同、これからも精進してまいりたいと思いますので、遠い空の上から、どうか見守っていてください。

中国鄭州にて。子どもと接している時の笑顔は特別だった。

Child Science

子ども研究

《インタビュー》

幼児がどんなアートに心ひかれるのかを、大人が先回りして決めてしまわない方がいい

杉浦幸子さん（武蔵野美術大学芸術文化学科教授）

杉浦幸子さんの専門は美術館教育。イギリスの大学院で学んでいる時に美術館教育に出会い、帰国後に個人的に教室を開いて、子どもたちと美術館を活用する活動を始めました。日本の幼児教育の現場では、美術に親しむのは遊びを通じてが多く、美術館での作品鑑賞はあまり行われません。しかし、杉浦さんは20年以上前から積極的に幼児と、また最近では赤ちゃんとも美術館を活用しています。長年の活動を通じてどんなことが見えてきたのか、お話をうかがいました。

（聞き手：日本子ども学会事務局長・木下　真）

幼児を連れて美術館に

――もともと、どんなきっかけから子どもたちを美術館に連れていかれるようになったのでしょうか。

杉浦：イギリスなど欧米では、美術館での学びを支援する「美術館教育」という仕組みがあります。私はイギリスの大学院で学んでいた時にその現場に出会い、美術館教育について学び始めました。その後、帰国してから東京の大田区でペンギンクラブという小さな教室を作って、子どもたちを美術館に連れていく活動を細々と始めたのです。24年前のことです。美術館教育を掲げて募集をしても、生徒は集まらないと思ったので、幼児がアートを通して英語を学ぶ教室も兼ねたものでした。

教室の子どもたちの様子を見ながら、2か月に1回程度、これはと思う展覧会を選んで、みんなで美術館に出かけました。ただ美術館に行くだけでなく、行く前にお話をしたり、当日作品を見ながら使うワークシートを作ったりして、作品にきちんと向き合えるプログラムを準備しました。参考にしたのは手元にあったイギリスの博物館教育についての書籍だけでしたので、ほとんど試行錯誤による手作り教育でした。

――幼児の美術教育というと、お絵かき遊びや折り紙づくりなどの創作活動を行うのが一般的ですが、美術館での作品鑑賞にこだわられている理由は何なのでしょうか。

杉浦：もちろん、私は作ることを否定するわけではありません。創作活動も作品鑑賞も、どちらも大切に思っています。

ただ、私が美術館での作品鑑賞にこだわるのは、口幅ったいですが、日本人の美術との付き合い方を変えたいという思いが根底にあるからです。日本では、美術館は、絵がとても上手かったり、専門の知識をもっているという美術に近い人たちや、静かに美術鑑賞ができる人たちが集まる場所になってしまっているように感じていました。美術館は鑑賞を通してアートから刺激を受ける生涯学習施設なので、限られた人たちだけでなく、もっと多くの人、とくに大人だけではなく、感受性の豊かな子どもたちにこそ開かれるべきだと思っています。

とはいえ、最近はずいぶん開かれた美術館が増えてきました。それでも小さい子ども連れだったりすると、

ペンギンクラブの鑑賞ワークショップ
（長泉院付属現代彫刻美術館）

保護者はびくびくしていないといけないように思いますし、嫌がられるのではないかという不安で行けない方もいます。受付で「かわいいお子さんですね、ようこそ」と言われれば。モチベーションも上がりますけど、「お子さん連れですか。うるさくしないでくださいね」と警戒心を示され、看視員がレシーバーをもって、部屋ごとに付いてこられたりしたら、気持ちは萎えてしまいます。ヨーロッパやアメリカの多くの美術館と同じように、日本の美術館も小さな子どもたちであっても、気楽に入っていける場であってほしいと思っているのです。

学びの場として美術館を活用する

――同じミュージアムでも、自然博物館は子どもたちのために開かれていますよね。

杉浦：社会教育施設だという意識が強いからだと思います。成り立ちの経緯が異なり、社会、理科、生活などさまざまな教科がかかわりやすく、教育的意義が認められやすい。それに比べると、美術館は美術の勉強にしか役に立たないと思われがちです。本当は美術も歴史や国語、宗教、理科などがかかわっていて、美術にとどまらないのですけど、社会科見学の場所として美術館が選ばれることはなかなかないようです。

また私は、自然博物館と美術館で子どもたちが得られる刺激が異なっていると思います。自然博物館にあるのは、主に自然のものですが、一方、美術館にあるのは人が作ったものです。時代を超えて受け継がれてきた作品は、作者たちや受け継いできた人たちの思いが詰まったミクロコスモスを成しています。自然物とは違った意味で奥深い世界であり、そのような違いがあるからこそ、大切にしてほしいと思うのです。

――ヨーロッパの美術館に行くと、子どもたちが床に腰を下ろして、輪になって、先生の説明を聞いている光景によく出くわします。日本でもそういうことは可能になるのでしょうか。

杉浦：私がもともと美術館教育に出会ったのは、イギリスに留学していた時代で、ウェールズの首都カーディフにある国立博物館でした。総合博物館で２階が美術館になっているのですが、1994 年の秋、床に座った子どもたちがモネの《ルーアン大聖堂》の絵を見ていたのです。イギリスでは、テート・ブリテンなど国を代表する美術館でも、そのように子どもたちが床に座って、壁の絵を見ていても、寝転がって天窓を眺めていても誰も何とも言いません。当たり前の光景ですから。でも、日本の国立美術館のエントランスで、寝転んで天井を見ている子どもたちがいたら、警備員さんが驚いて飛んでこられるだろうと思います。

――日本の美術館の場合、幼児を連れていると、どんな点で警戒心をもたれるのですか。

杉浦：「うるさくするのではないか」「走り回るのではないか」「作品に手を触れるのではないか」。美術館側はそういうことを気にすると思います。来館者の中にも、「美術館はちゃんとした大人の場所、子どもが自分の鑑賞を阻害するのでは」という心理的なバリアから、子どもがいるだけで「チッ」と舌打ちしたり、迷惑がる人は少なからずいます。

――子どもたち自身の作品鑑賞の様子はどんな感じなのですか。

杉浦：長年やってみて実感したのは、いかに子どもたちが刺激を受けたがり、学びたがる存在なのか、ということですね。作品についての知識は大人の方が多いかもしれませんが、美的体験を自分の中で発展させる力は、子どもの方がはるかに強くて、人が作った創造物であるアートと出会うことが、明らかに子どもたちの発達にいい影響を与えていると思います。赤ちゃん

カーディフ国立博物館での絵画鑑賞（カーディフ国立博物館提供）

は「今日は、こんなことを学んだよ」と言葉で伝えてはくれないですが、彼らが作品を見て喜々としている様子を見ると、五感で刺激を得て、何かを学んでいることは明らかですね。

ですから、経済的に恵まれた家庭で育ち、保護者の意識も高くて、美術館がある都市部で暮らしているような子どもだけではなく、もっと多くの子どもたちがアート作品に接する機会を作れるといいなと思っています。

――作品鑑賞と言っても、「教育」である以上、成果を求められますよね。何をもって活動を評価するのかと問われたら、どのようにお答えになりますか。

杉浦：私は学校の図工・美術の先生方から、その点に関してコメントやアドバイスを求められることがよくありますが、率直に言えば、作品鑑賞には、点数で測るような従来型の評価はなじまないと思っています。評価を求める人には、鑑賞の評価とは何か、どのような評価を行ったら良いのを逆に尋ね、新たな評価方法を一緒に作りたいですね。作品をいくつ見たのか、絵画の知識がどれぐらい増えたのか、といった定量的な評価だけでなく、どんなふうに作品や美術館を楽しんだのか、鑑賞した作品についてどういった発言をしたのかといった定性的な評価もできると思います。

――作品鑑賞にまったく興味を示さない子どももいると思いますが。そのような子どもは低い評価になりますか。

杉浦：私のいままでの経験からすると、美術作品に出会ってまったく興味を示さない子どもは、まずいませんでした。関心の持ち方が一人ひとり違うのは確かですから、全員一律のアプローチでは退屈したり、関心を示さない子も出てくるかもしれません。でも、美術館の楽しみ方はいろいろありますから、子どもをよく観察し、アプローチの仕方を考え、声がけをしながらていねいに接していけば、誰でも何らかの楽しみを見つけ出すと考えています。退屈する子どもがいたとしたら、その子に問題があるのではなく、プログラムや授業の設計に改善すべき点があるのだと思います。

――いまメディア機器の発達によって、子どもたちはあふれかえるほどのビジュアル情報に日々接しています。そのような子どもたちが美術館でアート作品を鑑賞する意義とは何なのでしょうか。

杉浦：近年、動画での表現が非常に増えていますが、動画は子どもたちが受け身の姿勢で鑑賞できてしまうものです。それに対して、アート作品の多くは、静止した絵画や彫刻なので、鑑賞となると自分の方から積極的にアプローチしていくことになります。想像力を発揮し、能動的に何かを発見する力を養うには、アート作品の鑑賞は最適だと思います。

「赤ちゃん美術館」をつくりたい

――これからは、どんな活動をしていきたいと思われていますか。

杉浦：先ほど教育の成果をどう測るかというお話が出ました。短いスパンでアート作品の鑑賞の成果をはかることよりも、長いスパンで鑑賞が子どもたちにどんな影響を与えるのかにとても関心があります。最近は、埼玉県の狭山ひかり幼稚園というキリスト教系の幼稚園の活動に注目しています。この幼稚園は40年以上、年長の子どもたちを上野の国立西洋博物館に連れていき、作品を鑑賞する活動を続けているのです。

最初に参加した幼児は、いまや50歳を超えています。そんな長期にわたって幼児の鑑賞活動を継続している施設は世界にも類を見ないので、美術館体験が子どもたちの成長にどのような影響を与えているのか、卒園生の調査をぜひさせていただきたいと思っていま

狭山ひかり幼稚園の美術館訪問（国立西洋美術館）

す。私も鑑賞ツアーに同行されてもらったのですが、子どもたちの自発的な鑑賞体験を生み出す、とてもいいプログラムを実践されていました。

――鑑賞ツアーは、具体的にはどんな流れで進むのですか

杉浦：まず西武池袋線の入間市駅で、先生方が保護者から子どもたちを預かるところから始まります。そしてレッドアロー号に乗って池袋に出て、山手線で上野駅まで向かいます。上野駅に着いたらまず国立西洋美術館の《考える人》と出会います。その後、上野公園でお昼ご飯を食べ、お菓子の交換をして、噴水を見たり、国立科学博物館前のクジラの展示を見ながら、再び国立西洋美術館に戻ります。館のコレクションの中にはキリスト教絵画が多いので、キリスト教系の幼稚園の子どもたちにとってはなじみが深く、キリストやマリア様が描かれている絵画を特に熱心に見ていました。

彫刻のエリアではポーズを真似したりしますけど、館内を走ったり、作品の前に引かれた線を踏み越えて作品に近づくような子どもはいません。鑑賞後、手にスタンプを押したり、ミュージアムショップで家族へのお土産を買うのも、美術館体験の一環です。最後はロダンの《地獄の門》を見て、美術館を後にします。朝からかなり長丁場になりますけど、帰りの電車内で眠ることもなく、元気なままで狭山ケ丘駅に着いて、迎えに来た保護者にその日の出来事について話をしながら帰っていきます。

ペンギンクラブの美術館訪問も同様な考えで行っていましたが、美術館の鑑賞だけでなく、電車での移動も含めて、一日の出来事がすべて子どもたちの学びになっていると思います。すぐに忘れてしまうと思う人もいるかもしれませんが、そんなことはなく、ペンギンクラブに来ていた子どもたちも、成人し、社会人になってからでも美術館訪問を覚えていて、振り返って、楽しかったと話しています。

――杉浦さんのペンギンクラブや「赤ちゃんとびじゅつかん」の活動などを通じて、子どもが好むアート作品の傾向が見えたりしましたか。

杉浦：子どもによって千差万別ですね。その子の成育歴や最近の体験の影響も受けますし、こんなものには子どもは興味をもたないだろうと大人が思っても、意外なものに興味を示すこともあります。子どもがどんなアートに心ひかれるのかを、大人が先回りして決めてしまわない方がいいと思います。それよりむしろ、赤ちゃんや子どもの反応を見て学ぶべきだと思います。

先日、私が勤務する武蔵野美術大学で教職員研修があったのですが、そこで「これからの大学で何かやりたいことは？」と問われて、「赤ちゃん美術館を作りたい」と答えました。赤ちゃんが関心を示しやすい作品や赤ちゃんに見てもらいたい作品を集めて、赤ちゃんファーストの展示を行う美術館です。展示の位置を低くして、幼児や赤ちゃんでも見やすい高さにするような工夫もしたいです。日本子ども学会や日本赤ちゃん学会で、赤ちゃんや幼児の発達に詳しい専門家の先生方のご意見もぜひお聞きできればと思っています。

美術館は地域の社会資産として、幅広い人たちのためにもっと活用されるべきだと思っています。美術館の多くは国公立で、運営の原資の多くが税金でまかなわれています。つまり、美術館は美術愛好者のためだけではなく、みんなのものであり、そこには将来の納税者となる赤ちゃんも子どもも含まれるでしょう。彼らが大人になったときに、「何の恩恵も受けてないし、興味もない」と言い出したら、「美術館など必要ない」ということにもなってしまいます。美術館を社会からなくさないためにも、小さい頃から美術館に親しんでもらう姿勢がますます求められると思います。

〈プロフィール〉
杉浦幸子（すぎうら・さちこ）
武蔵野美術大学芸術文化学科教授。1966年東京生まれ。1990年お茶の水女子大学文教育学部哲学科美学美術史専攻卒業。1995年ウェールズ大学大学院カーディフ校美術館教育専攻修了。2002年～04年、森美術館パブリックプログラムキュレーター。2005年～12年、京都造形芸術大学プログラムコーディネーター。2012年より武蔵野美術大学芸術文化学科准教授、2015年より現職。専門は美術館を活用する、多元的・複合的な「美術館教育」。現在、乳児と美術館をつなぐ「赤ちゃんとびじゅつかん」や、保育園にアート作品を常設展示する「保育園美術館プロジェクト」など、幼い子どもたちとアートを鑑賞を通してつなぐ教育を実践研究している。

トピックス －人物紹介－

岩本 悠さん

島根県教育魅力化特命官／
地域・教育魅力化プラットフォーム共同代表

〈プロフィール〉
いわもと・ゆう　1979年東京都生まれ。学生時代にアジア・アフリカ20ヶ国の地域開発の現場をめぐった体験をもとに『流学日記』を出版し、その印税でアフガニスタンに学校を建設する。卒業後は、ソニー株式会社で人材育成等に従事するかたわら、全国の学校で開発教育・キャリア教育に取り組む。2006年に海士町に移住し、教育を核とした地域創生に挑戦。現在は全国で高校魅力化に取り組む仲間たちとのネットワークを広げている。

教育の魅力で全国から離島へと人を呼ぶ

岩本悠さんは、島根県の隠岐諸島の海士町にある隠岐島前高校に、東京や大阪などの都市部の子どもたちを入学させる「島留学」という事業によって、都会をめざす流れと逆行する流れを作り出すことに成功したソーシャル・イノベーターです。もともとは東京出身で島根が故郷ではありませんが、ソニー株式会社で人材育成を担当していた時代に、たまたま海士町の中学校の出前授業に講師として招かれたのがきっかけで、2006年に会社を辞め、島に移住することになりました。そして、雇用の場を創出するのではなく、教育の場を魅力化するという独自のやり方で人口の流出を食い止め、人材を育成しながら地域の課題も解決していくという新しい方法論の確立に挑戦し続けています。

なぜ人口が減少し、過疎化が進む離島の高校に、わざわざ都会の子どもたちが留学してくるのか。岩本さんは「人・物・金・情報が集まりにくい孤島」という不利な条件を逆手にとって、未来を切り拓くための地域再生のモデルをみんなで作ろうと呼びかけました。学校だけを学ぶ場とするのではなく、島を丸ごと学校だと考え、課題が山積する地域こそ、学びを活かす場であるとしたのです。

田舎の魅力を伝えるには、「豊かな自然」「おいしい食べ物」「あたたかい人情」をアピールするのが常套手段ですが、岩本さんは、都会のように便利なものや刺激的なものが何もなく、多くの課題や困難を抱える過疎地であることを、あえてはっきりと留学希望者に伝え、そこで必要とされる知恵や生き方を身に付けることが、人間的な成長につながると訴えました。

当初は「島の学校で勉強したいと思う子などいるはずがない」「地元の子が出ていくのに、外から呼ぶなんて無理」「興味をもつとしたら、どこにも行き場がない問題を抱えた子どもだけだ」と、疑問視する意見がほとんどでした。

しかし、2010年度から全国８か所の都市で説明会を開き、都会と異なる環境で学ぶ意義について発信し続けると、新しい教育に関心を示す生徒や親たちが徐々に現れるようになりました。学校と塾を往復する毎日に飽き足らなさを感じ、もっと別の世界で自分の可能性を広げたい、異文化体験をしてみたいと考える中学生や、そのような思いに共感する保護者が都会には一定数いたのです。

隠岐島前高校の生徒数は、2009年には91名でしたが、2018年には179名にまで持ち直しました。地域留学生によって、廃校寸前だった島の高校が復活したという出来事は、地域再生を願う全国の市町村の注目を浴びました。都会の子どもたちを留学させる動きは他の地域にも広がり、「島留学」は、全国の高校を巻き込む「地域みらい留学」へと発展していきました。

昨年の「地域みらい留学フェスタ」という合同説明会には、北は北海道から、南は沖縄に至るまで、全国52校の公立高校が参加しました。いずれも離島や中山間地にあって、募集をかけても定員に満たない統廃合の危機にさらされている高校です。東京・大阪・名古屋などの都会の中学３年生たちに、地元の高校の魅力をプレゼンするのは市町村の職員や高校の教職員などですが、中には、在校生自らが母校の良さをアピールする姿も見られました。

並んだブースの高校の教職員からは、「あと５人新入生が減ってしまったら、統廃合の対象になる」と、危機感を募らせる声も聞こえますが、岩本さんは、たんに地域の高校を存続させるためだけに高校魅力化プロジェクトを進めているわけではありません。日本の未来を担える人材を育てるためのインキュベーターとして、離島や中山間地の公立高校をとらえているのです。成育環境が異なる多様な生徒たちが、価値観の違いを乗り越えて協力し合いながら、困難な課題に挑戦していく学びの場は大変スリリングだと言います。文部科学省や地方創生にかかわる行政機関も、そのような岩本さんたちの活動に熱い視線を注いでいます。

巨大タンカーを引っ張るタグボートのように、いま島根県の小さな離島が、日本の教育全体を新たな大海原へと導こうとしています。

（文・写真：日本子ども学会事務局長・木下真）

東京の中学生が北海道奥尻高等学校の説明に耳を傾ける

日本子ども学会　学術集会

第16回「子ども学会議」報告

テーマ「友だちってなんだ？」

家族・学校・メディアからみる子ども同士の世界

日程：2019年　10月26日（土）・27日（日）

会場：首都大学東京

「第16回子ども学会議」を終えて
報告と御礼

友だちってなんだ?
家族・学校・メディアからみる子ども同士の世界

大会長　**酒井　厚**（首都大学東京）

このたびは、第16回子ども学会議（日本子ども学会学術集会）にご参加いただきありがとうございました。令和になり初めての学会は、開設から70年目を迎えた首都大学東京（前：東京都立大学）の「心理学教室」で運営させていただきました。

本学術集会では、「友だちってなんだ？　―家族・学校・メディアからみる子ども同士の世界―」をテーマに、実行委員会メンバーと協議を重ね3つのシンポジウムを企画いたしました。

シンポジウム1では、友だちという存在のルーツについて、家族との比較から議論しました。シンポジウム2では、学校という文脈から、子どもにとっての友だち関係の機能について、肯定的な面と否定的な面の両者から検討しました。シンポジウム3では、これまでのメディアが子ども同士の関わりをどう捉えてきたかを整理し、これからのメディアを通じた友だち関係の在り方について考えました。いずれの発表も、異分野の人々が集う学際的な議論の場となり、子どもにとっての“友だちの意味”を探究する有意義な時間となりました。

また今回は、例年のポスター発表とともにラウンドテーブルを企画し、5つの演題が行われました。各演題は、就学前の子どものメディア接触に対する親の関わり方についてや、アクティブ・ラーニングや保育者・教師と子どもとの関係、インクルーシブ教育といった子どもの学びに関わるもの、非行経験のある少年の社会復帰に関するものと多岐にわたりました。いずれも現代の子どもたちの生活を考える上で極めて重要なテーマを扱っており、発表の場では興味・関心を共にする研究者や実践家が“仲間”として集まり、醸成された議論が展開されました。本学会を締めくくる学会理事長の榊原洋一先生のご講演にありましたように、本学術会議が、学会の趣旨である“子どもをめぐる学問同士のつながり”の一端を担うことができましたならこの上ない喜びです。

また、本学術会議では、誠に光栄なことに、イグ・ノーベル賞を受賞された本学会の理事である明海大学教授の渡部茂先生にご講演いただきました。イグ・ノーベル賞は、“人々を笑わせ、そして考えさせてくれる業績”を基準としており、先生の研究は「5歳児が1日に分泌する総唾液量」でした。ご講演では、実験のエピソードや受賞会場でのパフォーマンスについて軽妙な語り口でご説明いただき、科学の面白さを再認識させていただきました。

本学術会議はたくさんの方々に支えられて開催することができました。ご後援、ご協賛いただきました団体、大学、企業の皆様、全国からご参加、ご発表いただきました皆様、ご講演やシンポジウムに登壇いただいた方々、運営スタッフに心よりお礼と感謝を申し上げます。

Program プログラム

1日目 10月26日(土)

9：00 開会式

9：45 基調講演

「友だち関係を科学する：発達心理学からの視点」

酒井 厚（大会委員長・首都大学東京准教授）

11：30 シンポジウムⅠ

「家族から看る子ども同士の世界」

安藤寿康（慶應義塾大学教授）
岸本 健（聖心女子大学准教授）
亀井伸孝（愛知県立大学教授）
根ヶ山光一（早稲田大学教授）

12：30 昼休み／理事会

13：15 会員総会

イグ・ノーベル賞受賞記念講演

「人々を笑わせて考えさせる研究 — Ig Nobel Prize」

渡部 茂（明海大学保健医療学部教授）

14：00 シンポジウムⅡ（市民公開講座）

「学校から見る子ども同士の世界」

眞榮城和美（白百合女子大学准教授）
鈴木智裕（練馬区立関町北小学校主幹教諭）
やた みほ（白百合女子大学講師）
石坂 浩（石坂綜合法律事務所弁護士・社会福祉士）
宮本信也（白百合女子大学教授）
高橋英児（山梨大学教授）

16：00 ポスターセッション（前半・後半各60分）

18：30 懇親会・ポスター発表優秀賞表彰式

2日目 10月27日(日)

09：30 ラウンドテーブル（前半・後半各90分）

① **日本のインクルーシブ教育は本当にインクルーシブか？**

② **令和新時代における保育者・教師（養成）と子どもとの関係づくり**

③ **アクティブ・ラーニングを支える脳を知り、子どもの学びと成長に活かそう！**

④ **就学前期のメディア接触と子どもの発達**
— 親のメディアマネージメントの問題を含めて —

⑤ **少年非行とセカンドチャンス**
— 少年院の卒院者に話を聞く —

12：30 昼休み

13：30 シンポジウムⅢ（市民公開講座）

「メディアから視る子ども同士の世界」

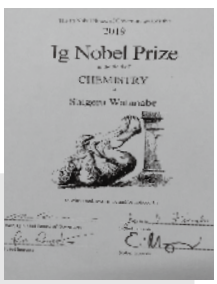
酒井 厚（首都大学東京准教授）
坂上浩子（NHKエデュケーショナル取締役）
おおばる（アートディレクター）
中野博之（集英社『週刊少年ジャンプ』編集長）
菅原ますみ（お茶の水女子大学教授）

15：00 講演

「子どもをめぐる学問のつながり」

榊原洋一（日本子ども学会理事長・お茶の水女子大学名誉教授）

15：30 閉会式



渡部茂教授の「イグ・ノーベル賞受賞記念講演」

1日目に行われた渡部茂明海大学教授（日本子ども学会理事／第7回学術集会大会長）の講演は、渡部教授の2019年度「イグ・ノーベル賞」受章を記念して企画された講演だった。

受賞対象となった論文は、渡部教授が同僚とともに4年をかけて研究し、1995年に執筆したもの。男女15人ずつの5歳児に6種類の食物を咀嚼後吐き出させ、一口量、咀嚼時間、回収率等を綿密に計算して食事中の唾液量を算出。食事以外の時間と合わせて「5歳児の1日あたりの総唾液分泌量が500ミリリットル」に上ることを突き止めた。

記念講演では、授賞式で、かつて被験者となった教授の3人のご子息も登壇して当時の様子を実演して爆笑と喝采を浴びたことなども伝えられた。

イグ・ノーベル賞は人々を笑わせ、考えさせる独創的な研究に贈られるが、地道な研究に一般の人々の注目を集めさせ、科学の面白さを再認識させてくれるという貢献にもつながっていると話を結び、会場から祝福の拍手が贈られた。

基調講演

友だち関係を科学する ― 発達心理学からの視点 ―

酒井　厚（首都大学東京人文社会学部准教授）

子どもの社会性や問題行動の発達には、遺伝や気質といった子ども側にある要因と、家庭や学校などの環境要因が相互作用しながら影響を与えていく。とりわけ従来の研究は、環境としての親の存在に注目し、その影響の強さを報告してきた。

一方、友だちによる影響はと言えば、親に比べて研究数が少なくわかっていないことが多い。子どもは、学校段階が上がるに伴い友だちといる時間が長くなり、親より一緒に過ごす場合も少なくない。親しく深い関わりを持つ存在にもなり得るのに、子どもにとっての友だちは随分と過少評価されていないか。その素朴な問いが本学会のテーマとなった。

本講演で紹介したJ. R. Harris氏は、まさにこの問いに真摯に向き合った研究者である。彼女は、心理学や人間行動遺伝学、人類学、進化学の知見を集約し、児童期以降の子どものパーソナリティや社会性の発達にとって、親の養育による影響はこれまで思っていたほど強くはなく、遺伝や子どもの仲間集団による影響の方が重要であると主張した。

1995年に発表されたこの集団社会化理論（Group Socialization Theory）は、子どもの心理社会的な発達にとっての親の影響力に疑問をなげかけたことで、メディアを通じてセンセーショナルに報道された。同時に、親子関係を専門とする研究者からは反発を買うことにもなった。

しかし、この理論はいささか極端に受け取られてしまったきらいがある。

Harris氏は、子どもの仲間集団が、彼らの親同士がつくるコミュニティの生活様式や文化の影響を受けて営まれると考えているため、親の存在が重要であることを否定してはいない。ただ、子どものパーソナリティや社会性の発達は、親との個人的なやり取りによる直接的な影響ではなく、仲間集団というフィルターを通して育まれていくと考えたのである。

近年では、集団社会化理論と同様な観点から、子どもの心理社会的な発達に対して親と友だちの影響を比較する研究も増えてきた。親子関係が悪くても仲間の存在が問題行動を抑制するという報告もあれば、親子関係が良好でも仲間に感化されて非行に走ることを示す結果もあり、これらの研究が示すのは、よくも悪くも“子どもには子どもたちだけの世界がある”という事実である。

現在、私は研究仲間とともに、子どもの社会性の発達と関連要因を探る縦断研究を行っている。幼少期の子ども同士の関係が、彼らの発達にどれだけ関わるかを示したかったこともあり、プロジェクト名はピアーズ（PEERS：Project of Environmental Effects on Relationships and Self）とした。日本語で“仲間”という意味である。3歳未満から調査に参加してくれたお子さんたちも、今は小学校高学年である。子どもの仲間関係が社会性の発達にどのように影響しているのか。親との関わりに比べてどのように異なるのか。これから少しずつ結果をまとめ、報告していきたい。

「友だちってなんだ？」。

本講演をお聞きいただいた皆様が、普段関わる子どもたちについて、あるいは自分の子ども時分を振り返ってみて、友だちの意義を考えるきっかけとなったならば幸甚の至りである。

◉プロフィール　**酒井　厚**（さかい・あつし）
早稲田大学人間科学部を卒業後、2002年同大にて博士号取得（人間科学）。国立精神・神経センター精神保健研究所、山梨大学を経て現職。専門は発達心理学、発達精神病理学。主な研究テーマは子どもが他者に抱く信頼感と仲間関係の発達プロセス。日本パーソナリティ心理学会賞、日本子ども学会優秀発表賞受賞。主著に『対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ』（川島書店）、『ダニーディン 子どもの健康と発達に関する長期追跡研究－ニュージーランドの1000人・20年にわたる調査から－』（翻訳、明石書店）など。

講 演

子どもをめぐる学問のつながり

榊原洋一（日本子ども学会理事長、お茶の水女子大学名誉教授）

子どもをめぐる学問分野はたくさんあります。保育学、幼児教育学、発達心理学、小児科学、児童精神医学、児童文学、児童福祉学、小児社会学、など多岐にわたります。

子ども学会の使命は、子どもに関する様々な分野の研究者や実践者が、学問的な垣根を超えて自由に議論し、子どものwell-beingの向上にむけて協力してゆくことです。

とはいえ、学問領域ごとの視点や研究の方策には歴史的な相違があり、そうした相違を克服することは必ずしも容易ではありません。私は小児科医として小児科学の視点で子どもを見ること慣れているために、他分野での研究や実践を十分に理解できないことがあります。

国連が提唱した「持続可能な開発目標」（SDGs）では、世界が直面する様々な課題を解決するための17分野の目標を定めています。貧困の解消、教育権利の保障、疾病からの解法など、子どもに密接に関わる分野ごとに、2030年までの具体的な到達目標が示されています。貧困の解消がSDGsの最初の項目ですが、最後の17番目の項目として、異なる分野どうしがお互いに協力しあうパートナーシップが挙げられています。SDGsの究極の目標であるNo one will be left behind（誰も置き去りにはしない）を達成するためには、異分野同士の理解と協力が必須であることが明示されているのです。

最近、私はパナマの国際小児科学会に参加しました。そこでは、もちろん病気に関する研究発表もありましたが、発表演題の過半は、戦争や飢餓、貧困や虐待に関するものです。日本の小児科学や心理学ではほとんど触れる事のないジェンダーに関する発表が目立ちました。現在でも世界の多くの国で、女児が男児に比べて教育の機会が少なく、その結果として低年齢での結婚、出産につながります。パナマの交際小児科学会では、未成年の女性の妊娠や出産が重要なテーマとして取りあげられていました。単純に考えれば、未成年の妊娠（teenage pregnancy）は産婦人科の課題ではないかと思われますが、国際小児科学会では小児科医の重要な課題の一つなのです。十分教育を受けていない未成年女子の妊娠は、未熟児出産率が高いだけでなく、不適切な環境での育児につながり、結果として次世代の子どもの健康や発達に悪影響が及ぶのです。ここに小児科医が、女子の教育格差やティーンエージの妊娠といった狭義の小児科領域以外にも関心を持ち関わって行く必要があるのです。

子どもの健康や発達を促進するにはどうしたらよいのかを探るために、子どもの健康や発達に関連する要因を探求する調査研究が、毎年たくさん行われています。そうした調査研究の項目に必ず含まれるのが、対象児の家庭の年収です。私も子どもの生育環境がQOLに与える影響について、国際比較調査を行ったことがありますが、親に答えてもらうアンケートには家庭の年収を書き入れてもらっています。匿名が原則のアンケート調査とはいえ、年収は個人情報なので、記入をためらう回答者がおり、アンケートの回収率が悪くなるのですが、必ず聞いています。その理由は、家庭年収は子どもの健康や発達に関するほとんどあらゆる指標に影響を与えており、統計解析をする時に年収を入力してデータを修正しないと、正確な分析ができないのです。

年収の低い家庭の子どもは健康状態や発達、学習の進達度などが、年収の多い家庭の子どもより得点が低くなるのです。年収以外の環境要因が、そうした指標にどのような影響を与えているのかを見るためには、この年収による補正が必須です。

裏返して言えば、子どもの健康や発達を向上させることにつながることになる「貧困状態の改善、撲滅」は、小児科医や教育専門家だけの課題ではなく、子どもに関わるすべての人の課題であるということです。

こうした専門領域の枠を超えた学会として小林登先生が創設されたのが子ども学会です。今後も子どもに関する課題（Child Issues）を統合的に議論し、新たな視点を創成してゆく場学会を目指していきたいと思います。

◉プロフィール　榊原洋一（さかきばら・よういち）
東京大学医学部医学科卒業後、東京大学付属病院、静岡県厚生連合会遠州総合病院小児科、心身障害児総合医療療育センター小児科、東京大学付属病院小児科を歴任後、ワシントン大学小児神経研究部研究員となり、1985年東京大学付属病院小児科助手に復帰。1988年医学博士号取得。東京大学付属病院小児科講師、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授、同理事、同副学長を経て現職。著者に『ヒトの発達とはなにか』（筑摩書房）、『発達障害と子どもの生きる力』（金剛出版）、『よくわかる発達障害の子どもたち』（ナツメ社）、『脳科学の壁』（講談社）、『脳科学と発達障害』（中央法規出版）など。

シンポジウムⅠ

家族から看る子ども同士の世界

企画・司会：**安藤寿康**（慶應義塾大学教授）

「友だち」とは血縁や性的関係とは異なる親密な個体間の関係である。このシンポジウムでは「友だち」のそもそもの由来を、進化的・文化人類学的・人間行動学的な視点から考察することを目差した。

話題提供1：「霊長類における親と友だち」と題する岸本健（聖心女子大学）の話では、実の母親でないチンパンジーのメス個体が、ふたごの子どものアロマザリングを行う事例が紹介され、母親役の個体の子への保護性の高さによって他者との社会的相互交渉が異なり、母親の養育スタイルが子どもの社会関係の構築に影響を及ぼすことが報告された。あわせて女子大生を対象に行った研究から、ヒトにおいても親の養育態度の個人差が子の後の友人関係の構築に影響を及ぼすことが示された。霊長類においては、子は生き抜くために、親との関係に応じ、どんな友人関係を構築するか決定する存在であることが示唆された。

話題提供2：「狩猟採集社会における子ども文化と友だちの役割：日常活動とグループ構成の分析から」と題する亀井伸孝（愛知県立大学）の話では、アフリカ熱帯雨林の狩猟採集社会における子どもの日常活動とグループ構成の分析から、友だちの意義と位置付けが検討された。狩猟採集文化の伝承における子どもの遊びの文化では、子どもたちが友だち、すなわち非血縁の同世代のメンバーとグループを構成することは、日常活動を展開する上で重要な前提条件となっている。親が子どもに対し強く拘束的な教育、訓練を行うことが少ない社会において、子どもが友だちとの社会関係を培い、日中時間を共に過ごす状況を見守ることは、遊びを通じた情報の交換・共有に資するほか、文化の伝承にも寄与することが豊富な事例から報告された。

話題提供3：「守姉の変遷にみる子ども世界と大人社会の関係」と題する根ヶ山光一（早稲田大学）の話では、沖縄の多良間島には守姉（ムリ゜アニ）という民間伝承型の少女によるアロマザリングの風習が紹介された。この風習によって守子（ウットゥ）は守姉がもつきょうだいや友達という異年齢集団ネットワークに自然に導かれる。また守姉も遊びの楽しさのなかでその世話を行い、その経験が育児行動を学習することにつながり互恵性がある。この風習は、本土復帰以降、ケアが保育園や学校など行政主導の施設型アロマザリングへと移行したことで、同年齢集団に対し専門家である大人がケアを行う形で、今日変貌し廃れつつある。

このシンポジウムでは以上のように、親子関係の中から「友だち」がどのように発生し、変貌してゆくかを、進化的、人類史的、近代史的といった幅広い時間軸の中で考察することを通じて、今日における子ども世界への示唆を得ることができた。

話題提供者
- **岸本　健**（聖心女子大学准教授）
- **亀井伸孝**（愛知県立大学教授）
- **根ヶ山光一**（早稲田大学教授）

シンポジウムⅡ（市民公開講座）

学校から見る子ども同士の世界

企画・司会：**眞榮城和美**（白百合女子大学人間総合学部 発達心理学科准教授）

近年、学校教育における課題（文部科学省、2006）として、次の４点が挙げられている。

1)子どもの学ぶ意欲や学力・気力・体力の低下傾向および社会性やコミュニケーション能力等の不足。

2)いじめや不登校、校内暴力等の問題の深刻化。

3)自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder:ASD）の子どもへの適切な支援などの子どもや学校教育に関する新たな課題。

4)開かれた学校づくりに向けた学校の説明責任や保護者・地域社会との信頼を深めることの重要性。

そこで本シンポジウムでは、学校現場の課題の複雑さや多様化を考慮し、教育・芸術・司法・医療の各領域で活躍している専門家たちから見た「学校における子ども同士の世界」について話題を提供してもらい、学校という場から見た「友だち」の機能を中心に、「友だち関係」について検討した。

話題提供１：小学校教諭（主幹）である鈴木智木裕氏からは、学校現場で見られる「子どもをとりまく環境の変化」・「毎年行う６年生の移動教室での実践」・「友だちの必要性」の３点に基づく話題提供がなされた。その中で、子ども自身が失敗から学ぶこと、人間関係の門を閉ざさないこと、一人でも大丈夫な子（一人で行動している時も平常心でいられる）の存在、といった点の重要性について考える機会が提供された。

話題提供２：アニメーション作家として活動しているやたみほ氏には、15 年程前から実践している小・中学生や親子を対象に視覚玩具やコマ撮りアニメーションのワークショップの中で見られた共同制作のプロセス・完成した作品を紹介していただいた。これらの実践を通して、共同制作の効果や子ども達への影響、配慮が必要な事項についての問題が提起された。

話題提供３：弁護士の石坂浩氏からは、10 年程前から取り組んでいる学校現場での「いじめ予防授業」について、その実践内容やポイントとともに、授業を受けた生徒の声が紹介された。さらに、不登校児童生徒との関わりの中から、子どもの本音（大人から「無理して学校に行く必要は無い。選択肢は多様。」と言われても「本当は学校に行きたいと思っている」という子どもの本音）に耳を傾けている様子など、第三者委員会（弁護士）の立場から見た子どもの現状とスクールロイヤーとしての実践について報告があった。

話題提供４：小児科医である宮本信也氏は、子どもたちの人間関係に与える特性（主として ASD）について説明した上で、日常的な事柄を理解することが困難な１％の ASD 児に努力を求めるだけではなく、そうした理解が ASD 児よりは困難ではない周囲の子どもたちに ASD 児への理解を求める方法論が検討されることの重要性について言及した。また、「これらの取り組みが、心のバリアーフリーにつながり、人への優しさをも身につけていくことが期待できるのではないか」との指摘がなされた。

指定討論：教育学者の高橋英児氏からは、「友だち」と「仲間」は一緒なのか？といった、「学校での友だち関係」を再考することの必要性について語られた。さらに、話題提供者４氏に対して、1)それぞれの立場から見た今の子どもたちの学校での「友だち」関係について思うこと・感じていること、2)それぞれの立場から、子どもたちの「友だち」関係に対して、学校の問題として感じていることは何か？ 学校に期待することは何か？という質問がなされた。

時間の都合のより、各話題提供者からの回答はごく短時間となってしまったが、本シンポジウムを通して、フロアの皆様を含む参加者全員が、「友だちとは何か？」について、ポジティブな面からだけではなくネガティブな面からも改めてじっくりと考える機会となったのではないかと考えている。

話題提供者

鈴木智裕（練馬区立関町北小学校主幹教諭）

やた みほ（白百合女子大学講師）

石坂　浩（石坂綜合法律事務所弁護士・社会福祉士）

宮本信也（白百合女子大学教授）

高橋英児（山梨大学教授）

シンポジウムⅢ（市民公開講座）

メディアから視る子ども同士の世界

企画・司会：**酒井　厚**（首都大学東京准教授）

インターネットの流通やデジタルメディアの発達に伴い、現代の子どもたちは幼い頃から多様なメディアに触れて生活している。本シンポジウムでは、メディアの作り手と子どもの発達の専門家を登壇者に迎え、子どもの友だち関係にとってのメディアのあり方について議論を展開した。

坂上浩子氏からは、自身が制作した幼児向け教育テレビ番組の紹介を通じて、子どもが他者と関わる力の育成を目指す上で、個性豊かなキャラクターが活き活きと描かれ人の多様性の素敵さを発信すること、子どもの能動性や創造性を喚起する遊びにつながるコンテンツを提供することの大切さが語られ、これからのメディアの可能性として「巻き込む（Engaging）」というキーワードが掲げられた。

おおばる氏からは、多様なメディアを連動させ個人がインタラクティブに関わるコンテンツを手掛ける立場から、楽しくアトラクティブな映像作品とともに、他者同士を現代的な関係性の特徴である“ゆるやかさ”に基づいて繋げるしかけが語られ、それらのメディアを通じて、人が他者の価値観や個性を尊重し、誰かのためになる行動を起こし、自己を肯定できる可能性があることが示された。

中野博之氏は、自身が手掛ける少年雑誌に掲載された作品を基に、マンガに描かれる友だちのあり方を整理しながら、いくつかの著名な「友情」シーンを紹介し、友だちが人生において大きな存在であると伝えていること、そのメッセージが子どもたちの支持につながっていることを報告した。また、マンガを読む媒体が変わり、かつてのように友だち同士が雑誌を回読して関わり合う状況が薄れるなかで、マンガやカードゲームなどの展開商品を介したイベントを仕掛け、興味を同じくする人々が関わる機会を持つことの意義を主張した。

指定討論を務めた発達心理学者の菅原ますみ氏からは、最近の子どものメディア接触実態の統計を紹介しながら、３名の話題提供者に対して２つの重要な問題が提起された。１つ目は、メディアで友だち関係を表現する際に、ポジティブな面ばかりでなくネガティブな面をどう考えてきたか、２つ目は、これからのメディアが友だち関係を促すにはどのような展開が予想されるかであった。１つ目の問題提起に対して、登壇者からは子どもの発達段階に応じた回答がなされ、とくに児童期以降の子どもに対しては、友だち関係のポジティブな面ばかりでは現実から乖離し受け入れてもらえないため、ネガティブな状況も含めたドラマを展開することが重要であると報告された。２つ目の問題提起に関しては、どの登壇者もこれからの大きな課題としながらも、インタラクティブメディアを通じて子ども自身のアイディアを吸い上げ、それを共有するなど、積み木やブロックが担う遊びの要素を持つツールの開発などが示唆された。

話題提供者
- **坂上浩子**（NHK エデュケーショナル取締役）
- **おおばる**（アートディレクター）
- **中野博之**（集英社 週刊『少年ジャンプ』編集長）

指定討論
- **菅原ますみ**（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系教授）

ラウンドテーブル ❶

日本のインクルーシブ教育は本当にインクルーシブか?

筆頭発表者：**榊原洋一**（お茶の水女子大学名誉教授、CRN 所長）

2006 年に、国連の障害者の権利に関する条約に日本は賛成、署名した。本条約の教育に関する第 24 条には、「障害者が障害に基づいて一般的な教育制度から排除されないこと、及び障害のある児童が障害に基づいて無償のかつ義務的な初等教育から又は中等教育から排除されないこと」と記されている。この「一般的な教育制度から排除されない」ことを保証する理念がインクルージョンあるいはインクルーシブ教育で、端的に言えば、障害の有無にかかわらず、全ての子どもが子どもの居住する地域の普通学級で教育を受けるということである。

本ラウンドテーブルでは、日本のインクルーシブ教育が、本当に国連の権利条約に沿ったものとなっているか、検証するとともに、現在の日本の障害を持つ人が直面する状況について異なった立場から問題提起を行った。

最初に榊原が、日本のインクルーシブ教育が、実際にはインクルーシブではないことを、制度面から検証した。次いで統合保育の行われている保育園の立場から大庭から以下の発言があった。

「障害者の権利条約の批准後、日本でも「インクルーシブ教育」という言葉は広がったが、日本独自の解釈がなされたため、本来の理念とはかけ離れた形で現場に浸透していると感じている。そして、それはインクルーシブを理解することの妨げにもなっている。子どもの発達は多様であると考えるならば、インクルーシブ教育の対象はすべての児童であり、特定の児童のためと考えることは、障害児・非障害児という区分をさらに広げてしまう可能性さえある。場の共有という本来の意味を踏まえた上で、どのように個別での支援を行っていくか、その試行錯誤が求められていると思うし、その実践を今後も行っていきたいと思っている。」

さらに、小学校校長時代に支援級から普通学級への転籍を積極的に推進した経験のある秋山が発言した。

「現役時代、区立の小学校で「小さな共生社会」を目指した学校経営を行った。学校生活はいつも同じ学年学級の子ども達と一緒。学習に関しては個人の学習能力に応じて個別で行ったり、小集団で行ったりする。合理的配慮をしながら、その子どもの持つ可能性を引き出す学校こそ、真のインクルーシブ教育を行っている学校と考える。現在、児童発達支援事業として「未来教室」を開催し義務教育が終わった 15 歳からの子供たちに「学びも継続」「地域の中で生活」を実践させている。6 年目にしてやっと義務教育時代では見つけられなかった一人ひとりの可能性が見いだせるようになってきた。障害の有無にかかわらず「学びは一生である。」と考える。」

さらに、当事者の立場から海老原が以下の発言を行った。

「今、障害者のための権利擁護活動を行なっているが、私が小さい頃と比べ、社会の障害者差別は変な形で根深くなっている気がする。「障害者のため」に地域社会から分離する。保育園でいいのに児童発達支援センター、地域の学校でいいのに特別支援学校、学童でいいのに放課後等デイサービス、アパートやシェアハウスでいいのにグループホームや入所施設…。小さな頃から当たり前のように「思いやり」の押し着せとして分離され続けているせいで、町の中でバッタリ障害者と出会った時に、困っているのかも、対応の仕方も分からない。そして勝手な推測でまた歪んだ先入観や差別につながっていく。この「思いやり差別」を断ち切るためには、インクルーシブ教育の実現が鍵を握っているはずだ。」

参加者

大庭正宏（太陽の子保育園園長）
秋山明美（カイノキサークル代表）
海老原宏美（東京インクルーシブ教育プロジェクト代表）
田丸敬一朗（東京インクルーシブ教育プロジェクト副代表）

ラウンドテーブル ❷

令和新時代における保育者・教師（養成）と子どもとの関係づくり

コーディネーター：**田中卓也**（静岡産業大学）

座長・コーディネーターの立場から田中卓也より「本ラウンドテーブルの企画趣旨」について説明後、開会した。5名の話題提供者の先生方に順次ご登壇いただいた。最初に関容子先生が、「放課後児童クラブ」を事例に「子どもにとって楽しく、安全・安心な居場所となるためには、すべての子どもの最善の利益につながる過ごし方が重要視されなければならず、支援員は幅広い専門性などが求められるものの、養成課程カリキュラムがいまだ未構築であること。子ども、保護者から信頼されるべく支援員の資質について今後しっかり検討すべきである」と重要な問題点を取り上げてお話くださった。

時田詠子先生は、「大学での教員養成は、学生に『実践的指導力の基礎』を身に付けさせること」とし、「令和時代になっても変わらない重要事項」と述べられた。学生と大学教員の連携はますます重要となり、課題解決できない学生への支援も必要になること、積極的なボランティアの取り組みがめざされる。理論と実践の往還は相乗効果をもたらし、学生に実践的指導力の基礎が身に付く」とご自身の経験にもとづきお話をいただいた。

志濃原亜美先生からは施設実習の担当者のお立場から「保育士の資格は保育所だけでなく、児童福祉施設でも必置の資格であるが、施設に就職を希望する学生が少ない。しかし、なかには実習を通して、施設に対する興味を深めた学生もおり、学生の養成と実習の質の向上が一層目指されなければならない」と貴重なご発表をいただいた。

小川知晶先生からは「社会福祉は生活課題を抱えている人に対し、問題解決へ導く働きかけを行うが、子どもに焦点を当てると、保護者の子育て不安、仕事と子育てのバランス、子どもの発達上の課題などが残っていて、家族や友人、地域のサポートでは充足できない。福祉ニーズの多様化に伴い、子どもと職員との関係づくり、実習生との関係づくりに関して原点に立ち戻り、子どもと保護者の信頼関係の形成や共感的態度についてより意識を深めることが重要である」とのご発表をいただいた。

最後に中塚健一先生が「これから教師になる若者に求められる『遊び』」について、「小学校教員が子どもと一緒に遊ぶ主要効果を①児童理解、②文化の伝達、③児童との信頼関係構築の3点とし、二次的効果に校内の危険箇所の把握、子どもを介する保護者との信頼関係づくりも期待できる。教員志望の学生に「遊びの重要性」や「教育の意義」を習得させる時代に入っている」との見解について話された。

参加者

関　容子（東京福祉大学）
時田詠子（群馬医療福祉大学）
志濃原亜美（秋草学園短期大学）
中塚健一（小田原短期大学通信教育部）
小川知晶（川崎医療福祉大学）

ラウンドテーブル ❸

アクティブ・ラーニングを支える脳を知り、子どもの学びと成長に活かそう!

筆頭発表者：仁木和久（お茶の水女子大学 人間発達教育科学研究所）

本ラウンドテーブルでは、早朝開催にもかかわらず40名ほどの参加者が集まり、有意義な時間を楽しむことができた。

最初に仁木和久が本ラウンドテーブルの企画趣旨と「ALの脳科学」を紹介し、内海緒香先生（お茶の水女子大）が「アートや創造とALとの関係」、安藤寿康先生（慶應義塾大学）が「独学脳Vs教育脳」の話題提供を行った。

仁木の話題提供では、「人間は、意欲と意図をもつ行為者として、生れながらにALの能力をもつ為、AL教育の本質は、人間・行為者の『行為をとおした学びの能力』を豊かに伸ばすことにある」ことを、行為を実現する脳のメカニズムに基づいて説明した。ALにおいて、ポジティブ感情や意欲が重要になる理由や、非認知能力とその獲得の重要性を、脳メカニズムの観点から示した。さらに、行為のレベルでの考察により、教育は「教えの行為者」と「学びの行為者」が「学びの場」で行うダイナミックな相互作用であり、脳科学と教育の架橋研究として論じられることを示し、会場との意見交換が行われた。内海先生の話題提供では、学びの環境デザインの視点からアート・芸術に注目し、STEAM教育が実践されていることが紹介された。アートをSTEM教育に取り入れることにより、ストレス軽減と認知発達への寄与、創造性と社会性の成長、さらには個性や多様性を育てることが期待できる。「光のデバイス」遊び等の実践が紹介され、「アートは障壁だらけの世界にあって、人と人をつなぐ媒体となる」と示された写真での子どもの表情が印象的であった。

安藤先生の話題提供では、生物学的視点から捉えた「教育」が議論された。生物は皆、主体的に学んでいるが、「教育」による学習で人間は、個体学習のように自由に学んでいない可能性を指摘し、学校教育で身につく学力が実は50%も遺伝であることをデータで明示した。現代の教育制度は、遺伝が生み出す多様性を、活かす制度になっていないかもしれないと問題提起し、そのことを実証的に示す脳研究の必要性を示唆した。生身の人間は、自分の本当の遺伝の中身を知ることができないので、多様性と可能性の中で、本当になりたい『自分探し』として学び、成長するのだろうかとの感想を持った。

参加者　内海緒香（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所）
安藤寿康（慶應義塾大学文学部）

ラウンドテーブル ❹

就学前期のメディア接触と子どもの発達

― 親のメディアマネージメントの問題を含めて ―

筆頭発表者：**菅原ますみ**（お茶の水女子大学基幹研究院）

急速に進化するメディアと子どもとのよりよい関係を構築するには何が必要か、分野・領域を超えて語り合うことを目的に、2017 年の学会誌特集号への論文掲載、2018 年大会ランチョン・セミナーに続き、今回は就学前期のメディア接触をめぐる親のかかわりについてフロアを交えて討論した。

菅原と松本は、テレビ視聴に関する０歳から 11 歳までの経年調査の分析結果について報告した。松本は、就学前期の接触時間量のトラジェクタリ分析によって３群（乳児期に長時間で低下する群・一貫して中程度の群・一貫して比較的短時間の群）が抽出され、これらのパターン間で子どもの行動の問題に差は認められなかったことを報告した。菅原は、子どもの視聴時間の長短には親自身のテレビ視聴時間が最大の要因であること、番組を選択し時間制限する傾向が高いことが子どもの接触時間を短縮することを示した。また、テレビ視聴中の親子の会話は、１歳から２歳への語彙獲得量の増加を促進する効果が認められたことも報告した。

高岡からは、乳幼児のスマートフォンの使用における親のかかわりについての調査報告があった。乳幼児のスマートフォンの使用頻度は増加しているが、使用時にコミュニケーションをおこなっている親子は全体の約半数であり、使用ルールを設定している親の割合は４年前より減少している。子どもの視聴行動を適切にコントロールすることの大切さやノウハウについての情報発信がより一層求められていることを述べた。

佐藤からは、親子のお話作りの支援ソフトウェアの開発研究の紹介があった。子どものデジタルメディア使用には、親の教示方法や提供するコンテンツの内容が重要であり、またコンテンツに教授・学習アプローチが適用されているか、どのような要件で設計されているかも重要であることを指摘し、子どもの体験をより豊かにするためにはコンテンツ開発者側の役割や責任も大きいことを強調した。

朝倉からは、物語創作の実践について報告があった。デジタルメディアを適所に活かした、子ども自らが物語の創り手となり、紙とデジタルの絵本をつくる活動である。子どもにとって、物語創作は大きな楽しみであり、自作が人に喜びをもたらす経験は、自尊感情や人への信頼を育み、大人（親）の側も子どもへの理解が深まる。子どもの生来の力を信じ伸ばすための支援をする姿勢がメディアを利用した活動にも重要であることを述べた。

参加者

松本聡子（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所）

高岡純子（ベネッセ教育総合研究所）

佐藤朝美（愛知淑徳大学人間情報学部）

朝倉民枝（株式会社グッド・グリーフ）

ラウンドテーブル ⑤

少年非行とセカンドチャンス

― 少年院の出院者に話を聞く ―

コーディネーター：木下　真（福祉ジャーナリスト、日本子ども学会事務局長）

第16回子ども学会議のメインテーマは「友だちってなんだ？」です。初日のシンポジウムでは、友だち関係の負の側面として非行グループを取り上げ、話題提供のスライドで特攻服を着た非行グループの集合写真を使用している発表者がいました。「非行少年」と言えば「暴走族」というのは、わかりやすい連想です。しかし、彼らが演じる「札付きのワル」のイメージをそのまま非行少年に当てはめてしまうと、実態を見誤ってしまう可能性があります。まずは頭の中からステレオタイプのイメージを払拭してほしいというお願いからラウンドテーブルはスタートしました。

話題提供者は、裁判官として少年審判にかかわった経験の豊富な元東京高等裁判所長官の安倍嘉人さんと、少年院出院者の自助グループ「セカンドチャンス」の理事長である才門辰史さんと、その団体メンバーのR君です。少年院送致という判断を下す役割だった裁判官と、処分を聞いて、頭の中が真っ白になり、ぽろぽろと涙を流した経験のある元非行少年との顔合わせになりました。

私たちがテレビドラマなどでよく見る裁判官は、一段高い場所から見下ろすように法廷を見つめています。しかし、少年審判の場では、裁判官は同じ目線で少年と対します。少年審判は、刑罰を科す場ではなく、少年を更生させるために、親も含めてみんなで非行に至った原因を確認し合い、解決策を考える場です。

安倍さんによれば、家庭裁判所の裁判官はカウンセラーのような役割も負っているそうです。少年が「申し訳ありません」と言えば、「誰に対して申し訳ないと言っているのですか？」と内省を深めるように促したり、「二度とこんなことはしません」と言えば、「生活をどう改めていくつもりですか？」と、親も含めて課題に向かわせると言います。それは主体的な判断力をもたせることで、再び生活環境を損ない、同じ過ちを犯すことがないようにするためだと言います。

今回、才門さんは、「当時は、裁判官は“敵”だとしか思っていませんでした。今回の安倍先生にお話しいただいたような思いを少年たちにも聞かせてあげてほしい」と感想をもらしていました。家庭裁判所の裁判官や調査官は、少年たちが犯した罪を暴くために仕事をしているのではなく、立ち直させるために課題と対峙させようとします。しかし、逸脱行動の渦中にある少年自身にそのような思いを伝えるのはなかなか難しいようです。

少年非行の背景には、大人の犯罪者とは異なる思春期の孤独があります。万引きにしても、窃盗にしても、薬物にしても、暴力沙汰にしても、それらは仲間を意識した遊びの延長線上にある場合がほとんどです。今回、登壇してくれた出院者のR君も、ヤンキーの先輩に憧れ、ひとり親であった母親が仕事を終えて、帰宅するまでの寂しさを紛らわすために非行グループに加わったと、そのきっかけを話してくれました。非行グループは、最高に楽しい居場所だったそうで、警察に逮捕されて、思い詰めた母親と顔を合わせるまでは、自分の犯した罪の大きさに気づかなかったと言います。

出院者の再犯率は約4割と言われています。しかし、才門さんは捕まっていないだけで、実際にはもっと多いという感覚をもっていると言います。少年院に送致されたことで、人間関係が狭くなり、親との関係もぎくしゃくする中で、どこにも居場所がなく、気がつくと、昔の非行グループと連絡を取り合って、行動をともにしてしまっていた。再犯者からは、そのような事情が語られるそうです。

才門さんが、セカンドチャンスという自助グループを作ったのは、非行グループ以外の居場所を作りたかったからだと言います。自分が更生したのは、矯正教育によって人格が変わったからではなく、信頼し合える人間関係が生まれたからだと感じているそうです。R君は、出院のときに法務教官からかけられた、「困ったときには人に頼りなさい」という言葉を大切にしています。セカンドチャンスは、過去に何をしたかは問いませんし、再犯しても門戸は開かれたままです。やり直すチャンスは何度でもある、それをポリシーに活動しているそうです。

話題提供者

安倍嘉人（元東京高等裁判所長官、公益社団法人家庭問題情報センター代表、弁護士）

才門辰史（NPO法人セカンドチャンス理事長）

R君（NPO法人セカンドチャンスのメンバー）

ポスターセッション

第16回子ども学会議では、46件のポスターが発表された。発表されたポスターは参加全理事の投票による審査が行われ、最優秀発表賞1つ、優秀発表賞2つが選ばれて、大会1日目の夕刻から行われた懇親会で表彰された。

【最優秀発表賞】

菅原ますみ、松本聡子、“子どもに良い放送”プロジェクト

「親のメディアマネージメントに関する長期縦断研究：“子どもに良い放送”プロジェクト」

【優秀発表賞】

稲田公子、笹谷沙歩

「幼児にとって友だちってなんだろう －5歳児の保育実践を通して－」

安藤寿康

「小学生における社会経済的格差と学習環境・学業成績に関わる遺伝要因の影響」

第15回子ども学会議
ポスターセッション最優秀発表賞 演題

親のメディアマネージメントに関する長期縦断研究 “子どもに良い放送”プロジェクト

菅原ますみ（お茶の水女子大学基幹研究院、お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所）
松本聡子（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所）
“子どもに良い放送”プロジェクト（NHK 放送文化研究所）

乳児期からのメディア接触の影響が世界的な関心となってきたことに伴い、親のメディアマネージメントに関する実証研究も活性化しつつある。57 研究のメタ分析をおこなった Collier et al.（2016）によれば、親の“制限的かかわり”は子どもの接触時間への弱い抑制効果が示され、また“積極的なかかわり”も問題行動傾向の減少に若干の効果が確認されているが、本邦での検討は少ない。本研究では、首都圏 1 都市に在住のコホートサンプル（2002 年に生まれた約 6,000 名から層化無作為抽出した 1,600 世帯を対象として縦断調査への参加を依頼した。第 1 回目の 0 歳時点で 1,160 名から有効回答が得られた。調査は経年で実施され、12 回目調査では 834 名から回答がありサンプル残存率は 71.9% である。）のデータより、0歳～11 歳までの子どものテレビ接触時間と親のメディアマネージメントとの関連を分析した。子どものテレビ接触時間を従属変数とした重回帰分析より、親自身のテレビ視聴時間が最大の効果量を示したが、メディアマネージメント変数も有意な関連を示し、共有的かかわりは接触・視聴時間を増やし、選択的かかわりは短縮する効果が認められた。選択的かかわりに関する0歳時の両親の4分位群別の接触時間の 12 時点での推移は、一貫して選択高群の接触時間が最低であることが示され、子どもが初めてのメディアに触れる時点でのマネージメントのあり方が重要であることが示唆された。

本研究は、“子どもに良い放送”プロジェクト研究倫理審査委員会での承認を得ており、研究についての説明をした上で保護者から書面にて同意を得ている。

	演題番号	筆頭発表者	タイトル
☆	1	稲田公子	幼児にとって友だちってなんだろう　－5歳児の保育実践を通して－
	2	廣瀬翔平	幼児は遊びの中でどのような会話をするのか　－砂遊び場面の観察による検討－
	3	杉本貴代	幼児の遊び仲間の認識と相互作用－個人と園ごとの特徴に着目して－
	4	堀田由加里	デジタル描画活動の協働的創造過程における幼児の参加枠組みに関する検討
	5	野嵜茉莉	幼児期における他者の偽りの感情の理解と心の理論・実行機能との関連
	6	久富彩音	音声駆動型キャラクタの振り向き動作による子どもの注意獲得・維持システムの開発
	7	多賀昌江	Still-Face 場面での3か月齢二卵性双生児の反応と母親の個性認知との関連
	8	齊藤恵美子	触れ合いについて：子どもたちへのインタビュー調査結果とタッチケアについての一考察
	9	眞榮城和美	就学移行期における子どもの自尊感情と母親の自尊感情との関連
	10	岸久美子	保育園における異年齢保育活動について　～わらべうたを使って～
	11	新城宗史	幼稚園における幼児の適切な環境としての集団規模について：宮古島市立幼稚園を背景に
	12	谷向みつえ	施設の子どもにとって友達とは何か?
	13	大江まゆ子	夜間保育施設に求められる家庭支援：2019 年度全国夜間保育園連盟実態調査から
	14	岡田たつみ	保育記録に関する一考察
	15	石沢順子	幼児期前期の子どもの保育中の身体活動量
	16	門倉悠真	養育者が記録するこどもの睡眠記録の信頼性　－夜泣きがある乳幼児を対象とした調査－
★	17	菅原ますみ	親のメディアマネージメントに関する長期縦断研究：“子どもに良い放送”プロジェクト
	18	葉口英子	教育テレビは幼児にいかなる歌・音楽を与えたか　－『なかよしリズム』を事例として－
	19	西岡直実	子どものつくる物語とキャラクターの特徴　－小学生の物語づくりワークショップから－
	20	コッペン紗季	つなげるプログラミング Knotty ワークショップの実践
	21	大野はな恵	文化芸術事業における子どもの意見表明権　－描画による意見聴取の試み－
	22	大門貴之	モノづくりを通じた子どもと大人の共創コミュニティ　－ VIVITA を事例に－
	23	田中卓也	絵雑誌『子供の友』・『コドモノクニ』の表紙の変遷と戦争への意識
	24	深町澄子	インド・ムンバイにおける子どものリズム感受及びダンス表現の特徴
	25	戸次佳子	小学生の協調運動の発達　－2年生と5年生の縦断的調査－
☆	26	安藤寿康	小学生における社会経済的格差と学習環境・学業成績に関わる遺伝要因の影響
	27	仁木和久	アクティブ・ラーニングにおける「ポジティブ感情」の役割：「拡張・形成理論」
	28	前田里美	生徒が自分の関心を行動に移すには：ワクワク感の学校・学年間比較に注目した実証研究
	29	社会福祉法人 あづみの森	神経発達障害児の運動発達、言語発達の遅れが知能指数に影響を与える要因の検討
	30	森脇裕美子	発達障碍特性を持つ子どもへの健康教育の検討Ⅰ　－体の仕組みを伝える保育活動の企画－
	31	田中麻貴	発達障碍特性を持つ子どもへの健康教育の検討Ⅱ　－遊び場サポート活動への期待－
	32	田中裕己	児童心理治療施設における子どもの発達支援の課題　－職員及び教員調査の比較を通して－
	33	鹿内あずさ	障がいを持つ在宅療養児への発達支援～スマイル・プロジェクト～
	34	村上優衣	障がいを持つ在宅療養児への発達支援～作業療法学生の学び～
	35	石井智也	スウェーデンの多様な発達困難を有する若者支援：BRIS への訪問調査を通して
	36	石川衣紀	スウェーデンの引きこもり若者支援プロジェクト－「FINSAM」への訪問調査から－
	37	谷川友美	教育 / 保育場面における保健技術（アレルギー症状出現時の対応）の学びの変化
	38	鳥海弘子	乳児観が乳児に対する保育や学習に及ぼす影響　－保育者養成校の学生を調査対象として－
	39	渡辺直人	保育士志願生徒のための一資料：保育者養成系専門学校の併修の有無及び併修校の調査
	40	近森けいこ	子どものケアに関する文献とその概念の変遷
	41	福永知久	幼児期の保育保健に関する統計と現場の認識の差異が教育プログラムに及ぼす影響
	42	古谷淳	男性保育者の「選択」と依拠する理論
	43	森谷路子	保護者が子育てにおいて重視していること：属性分析から
	44	平林今日子	就労と育児の両立における課題：エコチル調査京都ユニットセンター所属の母親の声から
	45	宮地由紀子	自治体条例における子どもの居場所
	46	梅田真樹	都会の砂場の砂に重金属は含まれるのか　～東大阪市の保育園・公園を例として

★マークは最優秀発表賞　☆マークは優秀発表賞

投稿論文

研究論文・研究ノート

日本子ども学会では、2019年9月から2020年2月まで
6編の投稿論文の審査を行い、1編を採択いたしました。
本誌では、採択論文1編を掲載いたします。
編集委員および査読者は以下のとおりです。

編集委員

榊原洋一
（編集委員長）
太田美代
大橋節子
木下　真
佐藤朝美
菅原ますみ
志村洋子
眞榮城和美
宮下孝広
渡辺富夫

査読者

内田伸子
遠藤利彦
上垣内伸子
小玉亮子
酒井　厚
榊原洋一
汐見稔幸
菅原ますみ
髙橋貴志
波多江洋介
眞榮城和美

日本子ども学会は「日本学術会議協力学術研究団体」です

チャイルドサイエンス, 2020, 19, 33-38

● 研究論文

障害のある幼児のメディア活用
～自閉症児へのコミュニケーションアプリの使用の試み～

Usefulness of Interactive Media for Children with Special Needs
~Use of a communication application for children with autism~

榊原洋一（お茶の水女子大学）　堀田博史（園田学園女子大学）

要約

タブレットにダウンロードした、インタラクティブなコミュニケーションアプリ（Voice4U）を、言語によるコミュニケーションができない５歳から９歳の自閉症児４名に試用した。対象児に本アプリになれてもらう初期のステージから始め、親子の双方向の意志交換をするより高度なステージに移行するように設定したところ、全員で親子双方向の意思交換の向上が認められた。従来の絵カード（PECS）や音声出力コミュニケーションアプリ（VOCA）に比較して、携帯性、操作性が優れているタブレット端末を介した本アプリの有用性が確認された。

キーワード：自閉症、タブレット、コミュニケーションアプリ、親子の意志交換

はじめに

自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder：以下ASD）は、注意欠陥多動性障害（Attention Deficit Hyperactivity Disorder：以下ADHD）や学習障害（Specific Learning Disorder：以下LD）とともに、発達障害の中核をなす障害である。ASD小児期の精神障害の中でその頻度がADHDについで高く、子どもの有病率は２％前後と高い。他人とのコミュニケーションの障害や感覚過敏、強いこだわりなどの症状のために、家庭や学校での社会生活上の大きな支障を来すことが知られている。

最新の診断基準（DSM-5、American Psychiatric Association, 2013）においては、ASD診断の必須の条件ではないが、その多くが乳幼児期からの言語発達遅滞を来たし、言語によるコミュニケーション能力の獲得が見られない症例も少なくない。

こうしたASDへの療育、教育の中心的な課題は、他者とのコミュニケーション能力の獲得である。聴覚的な刺激（音声言語）に比べて、視覚的刺激への感受性が高いという経験的事実に基づいた、絵カードやマカトンサイン（手話に似た簡単な手のサイン）などの教材が従来から使用されている１～５）。

本論文では、従来の紙媒体の教材に代わり、視覚と聴覚両方からの刺激提示が可能であり、さらに双方向的（インタラクティブ）な媒体であるタブレット端末（以下タブレット）の自閉症幼児のコミュニケーションツールとしての有用性をさぐった。

方法

1）対象

著者らが、３カ所の東京近郊の診療所ないしは病院での外来診療で経過をフォローしている５歳から９歳の自閉症スペクトラム障害と診断されている７名の男児を対象とした。自閉症スペクトラム障害の診断は、国際的な精神疾患の診断基準として使用されている DSM-Ⅳ（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorder, ver4, 1984）に準拠して行った。対象者はすべて自閉症の診断基準を満たし、有意味語の発語はないか、あるいは極めて限られている。７名の対象児のプロフィールを表１に示す。

表１：対象児のプロフィール（＊集計時点で記録が提出されている事例）

名前（イニシャル）	年齢	性	診断
SK＊	5	男	自閉症スペクトラム障害
YY	5	男	自閉症スペクトラム障害
YO	6	男	自閉症スペクトラム障害
RW	7	男	自閉症スペクトラム障害
HT＊	8	男	自閉症スペクトラム障害
YK＊	9	男	自閉症スペクトラム障害
YO＊	9	男	（折れ線型）自閉症

外来受診日に、研究の内容について親に説明し、書面でインフォームドコンセントを得た。また研究内容について園田学園女子大学研究倫理委員会の倫理審査を受け、承認された（承認番号　19-02-01）。

2）手続き

対象児の家庭に、コミュニケーション支援アプリ Voice4U （Voice4U 株式会社）をダウンロードしたタブレットを貸与し､以下のステップで対象児と家族（主にに母親）とのコミュニケーションの場で使用してもらい、その時の対象児のタブレットの使用状況について詳細なレポートを提出してもらった。

保護者に示したタブレット使用のステップを表２に示す。

3）使用アプリ（Voice4U）の特徴

使用したアプリは、自閉症スペクトラム障害などのコミュニケーションの困難な個人（小児、成人）を対象とした市販されているアプリである。図１にそのイメージを示したが、好みの絵カードをタップすると、その物の名前が音声出力されるというシンプルな設計となっている。家庭内外にある様々な物や、中性のアバターによる表情、行為、挨拶などさまざまなカテゴリーの絵カードが用意されている。絵カードは、使用者（親）が、画像（写真）を自由に取り込んで作成することができ、音声も入力文字の合成音声による発声に加えて、使用者の音声を録音することも可能である。

対象児の家庭内の写真や、対象児本人の写真の絵

表２：タブレット使用のステップ

ステップ１

まずお子さんの前で Voice4U を操作してお子さんに見せてください。（10分程度）

操作内容は自由ですが、基本的にはさまざまなアイコンをお子さんに見せながら、音声を出力してください。タブレットのボリュームは大きめに設定してください。

お子さんが関心を示すようでしたら､お子さんに触らせてあげてください。（10分程度）

時間は目安です。お子さんが飽きてしまったら短くても構いません。また、興味を示すようなら長くても構いません。

日にちや時間を改めて、このステップ１を数回試みてください。１回あたり 30 分程度が適当です。

お子さんの様子を別紙の記録シートにできるだけ細かく記載してください。文章でなく箇条書きでも構いません。

ステップ２

生活の場で実際に使ってみましょう。

こんどは、実際の生活の場で Voice4U を使ってみましょう。ステップ１を何回か試みてお子さんが関心を示さない場合でもステップ２に進んでください。

例えば、食事の時に食卓にある「牛乳」を指で指し示しながら、「牛乳」のアイコンにタッチして「牛乳」と音声を出力したり､朝起きて挨拶のカテゴリーの「おはよう」のアイコンをタッチして音声を出力させます。お子さんが関心を示すようなら、お子さんにもアイコンに触らせて音声出力をします。もちろんその後に、実際に「おはよう」と声かけをしてください。

ステップ２は、例えば挨拶のように短くでもよいですが、お子さんが関心を示す場合は、もっと時間をかけてもかまいません。同じ場面だけでなく、様々な場面でデフォールトのアイコンを使って試みてください。

ステップ２は成功、失敗にかかわらず少なくとも 10 試行以上行ってください。

記録紙は一試行ごとに１ページ使って下さい。

ステップ３

オリジナルのアイコンを作成し使ってみましょう。ここからは皆さんの工夫と創意がいかされるステップです。本研究でもっとも重要な部分です。

マニュアルの編集機能をよく読んでください。お子さんにとって馴染みのある物や場所、行為を選んで、写真をとり、あるいはネット上の画像をとりこんでも構いません。音声は文字入力するとアプリの方で人工音声で読み上げてくれますが、親御さんやお子さんの声を録音して使用することもできます。

お子さんの好きなおもちゃや慣れ親しんでいる場所の写真と親の声を組み合わせれば､お子さんにとって大きな動機づけとなります。お子さんの返事の声(はい、いやなど）が上手く入力できれば、それを使った双方向のコミュニケーションも可能です。

図１：Voice4U の絵カード
（Voice4U のウエブサイトより）

アバターでは、表情や気持ちの読み取りを促すアイコンで、ASD の子どもの特徴でもある性別認識能力低下を考慮して中性でしめしてある。指の図はボディランゲージの理解、公共の建物や室内の設備（風呂）、食べ物などのアイコンもある。こうしたアイコンは使用者（親）が、オリジナルな写真を取ったり、インターネットからの画像を取り込んだりして随意追加可能な設計になっている。

カードを適宜作成して、要求（「ミルクが飲みたい、グミが食べたい」）や、本人の気持ち（「眠い」「頭が痛い」「気持ち悪い」）などと組み合わせることによって、本人自身の発語がなくても音声言語による表出が可能になる。

結果と考察

7人の対象児のうち、詳細な記録の提出が可能であったのは4名（表1の＊印）であった。年長児からの回答が多かったのは、タブレットあるいはアプリの操作が年少児では困難であったためと思われる。

その4名の記録をもとに、表1に示したステージごとに、対象児のアプリを介しての親との関わりの様子を以下の表3～5に記述し、最後にその要点をまとめた。

①**ステップ1**：親がアプリを操作する様子を見せ、その後で対象児にタブレットに触れさせる（表3）。
②**ステップ2**：生活の場で実際に使ってみる（表4）。
③**ステップ3**：オリジナルアイコンを作って活用する（なお、既にステップ2でもオリジナルアイコンが使われている）（表5）。

ここに示したのは、母親からのレポートの実例の一部である。個人差があるが、ステップ①から③に進むに従って、親子がこのVoice4Uのアプリを使ってコミュニケーションを深めてゆく様子がよくわかる。

表3：ステップ1／親がアプリを操作する様子を見せ、その後で対象児にタブレットに触れさせる

親の提示行動	対象児の応答的反応
1. 絵を出して「これ何?」と質問してから音声出力をしてみせた。(SK)	1. 理解できていない感情表現などの絵も含めて、がんばってリピート（絵のタップ）をした。(SK)
2. 植物や鳥などの絵を追加して提示した。(SK)	2.「たんぽぽ」を「たんたんぽ」などといいながら30分間タップを続けた。(SK)
3. 新しい単語を多数増やして提示した。(SK)	3. 落ち着かず集中できなかった。(SK)
4. 新しい単語（鳥、虫）に加えて動詞を提示 (SK)	4. 集中できなかったがリピートした。(SK)
5. 対象児のそばでVoice4Uの絵を順番にタップして多数の音声を出力した。(YK)	5. 親の行動を見てケラケラ笑ったが、1分位で飽きてその場から離れた。(YK)
6. 食べ物のカテゴリーの絵を開いて渡した (YK)	6.「お昼ご飯」のアイコンが気に入り、何度もタップして音声出力をした。その後様々な食物の絵を押した。
7. 同上	7.「お昼ご飯」のアイコンを何回も押した。ピザのアイコンを何回も押した (YK)
8.「クッキーどれ?」「サラダどれ?」「お水どれ?」「スパゲティどれ?」と聞いた。(YK)	8.「クッキー」「サラダ」「みず」の絵を正しくタップした。「スパゲティ」は「ラーメン」を押してしまった。(YK)
9.（親が）「お気に入り」に登録した「アイパッドが見たい」「グミが食べたい」アイコンの画面を見せた。(YO)	9.（一時間後アイパッドを手に取り）「グミが食べたい」のアイコンに自分でタッチした。音声「グミが食べたい」を聞いて「グーーたい」と発語した。(YO)
10.（起床後YOがアイパッドを持ってきたので）ホームボタンでアプリを開いた。(YO)	10.「アイパッドが見たい」のアイコンにタッチした (YO)
11.（対象児が手持ち無沙汰にしていたので）本人の前で操作してみせ、様々なアイコンにタッチさせた (YO)	11.「ヘルプ/お願い」のアイコンを押し、「お願いがあります」をタッチした。(親の「お願いがあるの?」という問いかけに対して)「うん」「DVD」と発語した。(YO)
12.DVD見たいの?」「何?」と聞き、「はい/いいえ」のアイコンを示した。(YO)	12.「うん」「DVD」と発語あり。「はい」にタッチし、親の手を引いて(DVDのある)部屋へ親の手を引いて行った。(YO)
13. テレビをみていたので、対象児の前にアイパッドを置き、「見る」の画面を提示した (HT)	13. アイパッドの画面にタッチするが、5本指でタッチするために、反応しなかった。(HT)
14. 横になってテレビを見ていたので、「寝ます」の画面を提示した。(HT)	14.「寝ます」のアイコンを5本指でタッチするが反応しなかった。(HT)
15.「○○(兄弟の名前)」「ばば」「まま」のアイコンを作成し、実際の写真を入れた。(HT)	15.「○○」のアイコンに興味を示し、10分間繰り返してタッチした。(HT)
16. 放課後デイサービスで、本アプリを使ってもらえることになった。好きな食べ物の写真を見せた。(HT)	16.「ジュース」「ハンバーグ」など喜んでタッチした。1本指でタッチすることに慣れてきた。(HT)
17. スリープ状態のタブレットを見せた。(HT)	17. 自分でアプリにタッチして起動した。(HT)

表4：ステップ2／生活の場で実際に使ってみる

親の提示行動	対象児の応答的反応
18. みそ汁をよそっている写真をアイコンにアップして、「みそ汁をよそってください」と録音したものを、提示した。(SK)	18. キッチンに来て、手伝ってくれた。(SK)
19.「ご飯をよそってください」のアイコンを提示した。(SK)	19. ご飯をよそった(親が手で支えて)。その後アプリを使わずに「ご飯をよそって」というと手伝うようになった。(SK)
20.「食器をさげて」というアイコンを作成し提示した。(SK)	20.「食器をさげる」をリピートすると、食器を片付けた。その後アイコンを使わなくても「食器をさげて」というとさげるようになった。(SK)
21.「お辞儀をする」というアイコンを提示してお辞儀の練習をした。(SK)	21.「お辞儀をする」というアイコンに繰り返しタッチし、「おじぎ」と繰り返し言った。
22. アイコン「お辞儀をする」を聞かせた。(SK)	22.「おじぎをする」とリピートした。アプリを使わずに「おじぎをする」というとお辞儀ができるようになった。(SK)
23.「タオルをたたむ」というアイコンを提示したのちにタオルのたたみ方を実践してみせた。(SK)	23.「タオルをたたむ」をリピートして見たのちに3枚タオルをたたんだ。(SK)
24.「洗濯物を干す」のアイコンを作成し提示した。(SK)	24.「洗濯物を干す」を繰り返しタッチしたあと、一緒に洗濯物を干すのを手伝った。(SK)
25.「洗濯物を干す」のアイコンを見せて、「「これは何してる?」聞いた。	25.「洗濯物を干す」のアイコンをみて「洗濯物をたたむ」と言った。
26.「洗濯物をたたむ」と間違ったので、「洗濯物を干す」と「洗濯物をたたむ」のアイコンを交互に見せて比較させた。(SK)	27. アイコンで「ポケットからティシューを出す、いれる」を繰り返しながら、実際にポケットからティッシューとハンカチを出し入れする練習を行った。(SK)
27.「ポケットにハンカチとティシューをいれる」「ポケットからハンカチとティシューを出す」のアイコンを作成し、リピートさせた。(SK)	28.「ミカンの皮をむく」をリピート。リピート後ミカンを褒美にもらった。(SK)
28.「ミカンの皮をむく」のアイコンを登録した。(SK)	29.「牛乳」のアイコンを押した。(ので親は牛乳を差し出した)。(YK)
29. アイコン「水」をタップしてから、本人に水を差し出した。飲み終わった後に、アイコンの「水」と「牛乳」を指差しながら、どっちを飲むと聞いた。(YK)	30.「リンゴジュース」のアイコンを押した(ので、親はリンゴジュースを渡した)。(YK)
30.「りんごジュースを飲みたい?」と聞いた所手を挙げたので、「リンゴジュース押して」と言った。(YK)	31.「ピザ」を何回もタップした(ので、「ピザで来たよ」と親は答えた)。(YK)
31.「ピザ押してー、ピザ食べよう」と声かけした。(YK)	32.「はい」のアイコンを何度も押して、「はいはいはいはい・・」と発声させた(YK)(親は「返事できたね」と返した。
32. 名前を呼んだ。(YK)	33.「ありがとうございます」のアイコンを一緒に押した。(YK)
33. チョコレートを「はいどうぞ」と言って渡した。アイコンで答えたので「どういたしまして」と返事した。(YK)	34-1.「気持ち / 行動」から「おこっています」のアイコンをタッチした。
34-1. 学校から帰宅後「Y(子どもの名前)はどんな気持ち?」と聞いた。	34-2.「ヘルプ / お願い」にタッチした。続けて「お願いがあります」「手伝ってくれませんか」に続けてタッチした。
34-2.「怒ってるの? これやりたくないのかな。何かしたいの?」と返した。	34-3.「グミが食べたい」「アイパッドが見たい」とタッチした。(YO)
34-3.「何?」といいながら「お気に入り」を選んでタッチした。	35.「ぎゅうにゅう」をタッチした。(YO)
34-4. グミとアイパッドを渡した。(YO)	36-1.「みず」のアイコンをタッチした。
35-1. 夕食前に冷蔵庫の前で「うーん」と声をだしていたので、アイパッドで「食べ物」を提示し手渡した。(YO)	37-1.「ごめんなさい」アイコンをタッチしたあと、「ごめんなさい」と言った。(YO)
35-2.「ぎゅうにゅうをどうぞ」と手渡した。(YO)	38-1. じっと見つめるが、答えたいアイコンがなく、適当なアイコンにタッチしていた。(YO)(この後インフルエンザと診断された)
36-1. Y がコップを持ってきて渡したので、「食べ物」のアイコンを提示した。	38-2. キッチン台のアイパッドを母親の所にもってきてアプリを指導した。「お気に入り」という新作アイコンから「パパとサッカーしたい」「パパとお散歩行きたい」をタッチした。(YO)
36-2. 水を冷蔵庫から出し、「どうぞ」と手渡した。(YO)	39. 自ら「ハンバーガー」「ピザ」のアイコンをだしてタッチした。その後親に「いただきます」の合掌をさせては「ピザ」にタッチした。(HT)
37-1. 夕食後牛乳の入ったコップを倒し床にこぼしたので叱った後、理由を説明し「気持ち / 行動」のアイコンをみせ、「どうするの?」と聞いた。	40. 写真を取って作成した「パパ」「ママ」のアイコンを押し「パパ」と言った。「○○(兄弟の名前)」のアイコンを押して、自分の胸に手をあてた。(HT)
37-2.「分かりました」といいながらハグした。(YO)	
38-1. 朝から発熱していたので、「気持ち / 行動」のアイコンを提示、「痛いです」「熱いです」「寒いです」を提示した。(YO)	
38-2.(インフルエンザで学校欠席) 外出できないのでアイパッドをキッチン台においたままにしておいた。(YO)	
39. 特に働きかけなし。(HT)	
40. 特に働きかけなし。(HT)	

自閉症スペクトラム児とのコミュニケーション（訓練）ツールとして、絵カードは昔から使われてきており、その効果も実証されている。例えばPECSは、1985年に開発された絵カードによる自閉症児などのコミュニケーションツールでその有用性についてたくさんの研究報告がある[1) 2) 3)]。しかし、絵カードのやり取りという方式に内在する以下のような限界がある。絵カードの選択操作は、絵カードの数が増えると煩雑になり時間がかかる。絵カードには音声情報を載せるためには、常に第三者の援助が必要になる。一連の流れのある行動（動作）を示す絵カードの作成がやや困難である（例:一緒に外で父親とサッカーをしたいなど)。絵カードに音声を組み合わせたVOCA（voice output communication aids）は、絵カードに音声を組み合わせることのできるツールであり、その有用性についても多数の報告がある[4) 5)]。今回使用したVoice4Uの基本的な原理はVOCAと同じであるが、携帯性、操作性や使用する画像の多様性は従来のVOCAにはないものである。

今回はアプリをタブレットに入れて使用したが、画面の小ささという問題はあるが、スマートフォンに入れて外出先で使用することも可能である。従来のVOCAの装置との比較は、ちょうどパソコンとスマートフォンの比較になぞらえることができる。絵カード（PECS）や従来のVOCAと比べて、Voice4Uのようなコミュニケーションアプリの優れている点は以下のような点になるだろう。（→でその特徴が生かされた対応例の番号を示す。）

①多様な音声出力ができること。合成音声だけでなく、家族の声をそのまま入力することも可能である。子どもが1人で操作していても、音声を聞く経験ができる。→2、2、37、40など

②単語だけでなく、文章を入出力でき、絵カードでは困難な行為や思考（気持ち）の流れを表現できる。→ 9、10、11、18、19、20、23、24、27、28、34、

表5：ステップ3／オリジナルアイコンを作って活用する

親の提示行動	対象児の応答的反応
41. 新作アイコン「鉛筆を削る」「鉛筆削り」「鉛筆を削る」を提示し、リピートするように促した。(SK)	41.「鉛筆を削る」をリピートしたあとに、親と一緒に鉛筆を削った。(SK)
42. 新作アイコン「学校の準備をする」「学校の準備をする」をリピートさせてから、一緒に準備をした。(SK)	42.「学校の準備をする」のアイコンをリピートしてから、親と一緒に学校の準備をした。(SK)
43. 新作アイコン「歌をうたう」「鍵盤ハーモニカを弾く」「歌をうたう」のアイコンをリピートさせてから、親子で一緒に歌をうたった。(SK)	43. リピートさせた後一緒に歌を歌ったり、鍵盤ハーモニカの練習をした。
44-1. ごはんの食事内容を写真に撮り「たまご」「納豆」「鮭フレーク」「カレー」「魚」のアイコンを新作した。(YK)	44-1. 自ら「たまご」のアイコンをタッチした。また頻繁に「カレー」のアイコンにタッチした。
44-2.「夜ご飯はお肉食べた、お魚食べた?」と聞いた。(YK)	44-2.「魚」のアイコンにタッチした（正解）(YK)
45.. 新作アイコン（写真）「昆布 :「野菜ジュース」「牛乳」「野菜ジュース」「みず」のアイコンを見せ、「どれが飲みたい」と聞いた。(YK)	45.「野菜ジュース」のアイコンにタッチした（ので、野菜ジュースをあげた)。(YK)
46. 朝食のとき「何食べる?」と聞いた。(YK)	46.「昆布」のアイコンをタッチした（ので昆布をご飯の上に載せた）(YK)
47. 新作アイコン「うどん」「そば」「ラーメン」「スパゲッティ」「めんめん、どれ食べたい?」と聞いた。(YK)	47.「スパゲッティ」のアイコンにタッチした（ので夕食はスパゲッティにした。(YK)
48. 新作アイコン「おかあさんと一緒」「いないいないばあ」「しまじろう」「クレヨンしんちゃん」「どらえもん」をインターネットから取り込み作成した。テレビのところまで親の手を引いてゆくので「何みたい?」とアイコンをしめす。(YK)	48.「いないいないばあ」をタッチした（ので、いないいないばあをつけた）(YK)
49-1. 新作アイコン（既出）「パパとサッカーがしたい」「パパとお散歩行きたい」アイパッドをキッチン台の上に置いておいた。(YO)	49-1. アイパッドを持ってきて父親の横に座わり「パパとサッカーがしたい」「パパとお散歩行きたい」を連打した。(YO)
49-2.「そうだね、今日は寒くて行けなかったけど、また行こうね」と言った。(YO)	49-2.「グミが食べたい」「おなかすいた」「アイパッドが見たい」「DVDが見たい」と次々に父親に要望をアイコンで示した。(YO)
50. 新作アイコン「気持ち / 行動」に「課題やりたい」を追加した。デイサービスで、おやつ前に課題をやることになっている。(HT)	50. 課題をやりたいときに、「課題やりたい」→「おやつ」という順番でアイコンにタッチするようになった。(HT)

38、41、42、43、50 など
③アイコンをタッチ（タップ）するという動作を、コミュニケーションのきっかけややり取り（ターン・テイキング）の合図（キュー）とすることができる。
④画像は写真やインターネットからの取り込みによって、短時間で簡単に作成できる。
⑤大量の絵カードをコンパクトに持ち運ぶことができる。スマートフォンにアプリを入れれば外出先でも多量の絵カードが使える。
⑥本人の経験を写真に撮ることによって、過去の思い出を話題にすることができる。

こうした利点があるために、事例の 11−12、18−19−20、34、49 ではあたかも、タブレットを介して親子が自然の会話をしているような流れが生まれていることが分かる。

定型発達児のタブレット使用は、親子関係を希薄にするといった懸念もあるが、自発言語による会話が成り立ちにくい子どもの場合は、むしろタブレットのアプリを介した親子のコミュニケーションが促進されていることが分かる。そうした実感は、今回協力してもらった複数の親からの以下のような意見からうかがうことができる。

- Voice4U を使用するようになってから、コミュニケーションを自分からとろうとする意欲が見られます。発声できなくても、おはようやおかえりなさいの時に、相手と右手でタッチすることで、自分の挨拶として定着してきた。（YO）
- 発語は相変わらず不明瞭な時も多いが、視線を合わせる時間が長くなり、必ずアイパッドを探して持ってきて自分で入力し、要求を伝えることが定着している。（YO）
- 特に欲求が強い食べものはや行きたい場所で、自分の思いが伝わらず、癇癪を起こしてしまうことが多かったのですが、タブレットを使うことで、思いがスムーズに伝わり、癇癪は減りました。（YK）
- 絵本や絵カードの中から（２択や３択くらいだったらスムーズなのですが、多くなると難しくあきらめてしまったりする）１つのものを選ぶのに時間がかかってしまったり、分かるものも分からなかったりすることがあるのですが、機械類がすきだからでしょうか、選択肢が多くてもタブレットで選ぶのは早く正確なようです。（YK）

自閉症スペクトラムの子どもの子育てには困難が多いが、タブレットを介したコミュニケーションの場を、親が工夫しながら作り上げてゆく作業が、以下の親のモチベーションを高めていることが、親の感想からもうかがえる。

- 今後もいろいろ考えながら楽しく続けてゆきたいと思います。タブレット活用の機会を頂きました事、ありがとうございました。（HT）
- 今は抽象的な言葉を理解できていないので、嬉しい気持ちや悲しい気持ちなど、その時の気持ちを表情に表したアイコンをいれて、その状況に会った気持ちをタブレットでタップしながら教えてみたいと思います。（KY）
- 今後の課題としては、「お気に入り」に本人が伝えたいと思えるようないろいろなバリエーションのアイコンをオリジナルで増やしたいのと、家の中だけでなく、外出時にも持ち歩きコミュニケーションツールとして活用させたい。（YO）

まとめ

タブレットにダウンロードしたインタラクティブなコミュニケーションアプリ（Voice4U）の有用性について５歳から９歳の４人の自閉症児で検証した。今回検証に使用したアプリは、従来の PECS や VOCA などのコミュニケーションツールと基本的な機能は同等であるが、その携帯性、操作性のうえで上回っており、本研究で示されたように、言葉によるコミュニケーションがほとんど成り立たない年少の自閉症児との双方向的な意志交換を促進する効果があることが確認された。

〈引用文献〉

1)今本繁、門司京子 . (2014). 自閉症児に対する視覚的スケジュールと PECS（絵カード交換式コミュニケーションシステム）を用いたトイレのこだわり行動の減少とトイレ要求行動の形成. 自閉症スペクトラム研究 , 12:69-75.
2)小井田久美、園山茂樹、竹内康二. (2004). 自閉性障害児に対する PECS によるコミュニケーション指導研究：その指導プログラムと今後の課題 . 行動分析学研究 . 12:120-130.
3)熊　仁美、山本淳一. (2014). 自閉症児の音声言語要求の獲得と拡張に及ぼす PECS とマトリックス訓練の効果 . 特殊教育学研究、51:407-419, 2014.
4)逆井聡 . (1997). 自閉性障害児への VOCA を利用したコミュニケーション指導 . 特殊教育研究. 34:59-64.
5)北島英樹、武田篤 . (2007). 自閉症児に VOCA を活用したコミュニケーション指導 . 秋田大学教育文化学部実践研究紀要 . 29:35-44.

なお、本研究は科学研究費補助基盤研究（B）「黎明期を迎える幼児教育でのタブレット端末使用に関する研究」（主任研究者　堀田博史）の補助を受けて行われた。
なお、Voice4U は研究用の無料提供プログラムを使用したため KOI はない。

チャイルドサイエンス, 2020, 19, 39-44

● 研究論文

3歳未満時での母親の就業
―養育態度を媒介した子どもの行動特徴との関連―

菅原ますみ（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系教授）
松本聡子（お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所特任アソシエイトフェロー）
酒井　厚（首都大学東京人文社会学部准教授）　**高岡純子**（ベネッセ教育総合研究所主席研究員）
持田聖子（ベネッセ教育総合研究所主任研究員）　**後藤憲子**（公益財団法人福武財団助成部門副部長）

要約

0歳から2歳までの子どもを持つ初産の女性を対象とした全国調査（ベネッセ次世代育成研究所, 2006; 2011, *N*=3,703）のデータを用いて、3歳未満時での母親の就業の有無と養育態度との関連について、仕事と養育の多重役割の経験は親の個人としての成長や対人関係性の健全維持につながり、ペアレンティングをより良質のものにしうると仮定する役割拡張理論（role expansionist theory, Barnett & Hyde, 2001; Buehler et al., 2014）の枠組みに沿って分析をおこなった。また、母親の養育態度を媒介してこの時期の子どもの行動特徴（睡眠の規則性・衝動の統制不全性）とどのような関連を持つのか同時に検討した。重回帰分析を用いたパス解析より、弱い関連ではあるものの、就業が養育の良質さを経由して子どもの行動特徴に対するポジティブな関連を有することが示され、役割拡張理論を支持する結果が得られた。

キーワード：初産，母親の就業，乳児期，養育態度，子どもの行動特徴

1．問題と目的

2014年以降、政府は国家戦略として女性の仕事と子育ての両立支援を強力に進める方針を明らかにし（日本政府, 2014）、乳幼児期の子どもを持つ女性の就業率も増加しつつある。平成30年度の国民生活基礎調査（厚生労働省, 2019）では、末子年齢2歳以下の母親の就業率は、0歳38.3%（正規職27.4%・非正規職10.9%）、1歳40.8%（正規職31.5%・非正規職19.3%）、2歳56.2%（正規職29.2%・非正規職27.0%）と半数程度にまで上昇しているが、正規職は3割程度に留まっている。日本と欧州6ヵ国（スウェーデン・フィンランド・オランダ・フランス・ドイツ・イギリス）の末子年齢階級別の母親の就業率を比較した竹沢（2019）によれば、0歳～2歳では日本は43.3%と最低で、スウェーデン77.3%・オランダ75.6%・イギリス61.6%等とは未だ大きな差がある。妊娠・出産を機に仕事をやめる日本の女性は依然として多く、労働政策研究研修機構の2016年の調査（2017）では、第1子の妊娠中に退職した女性は21.1%、出産後では42.8%であり、6割以上が妊娠・出産を機に離職している。

妊娠・出産期の女性の離職率が高い原因の1つとして、社会に深く浸透している“3歳児神話”（3歳頃まではもっぱら母親の手で子育てすべきであり、早期での母親の就業復帰は子どもの発達に悪い影響を及ぼす可能性があるとする社会的信念）の存在があげられ、就業意欲のある母親たちの心理的な抑制要因となっていることが指摘されている（柏女, 2008）。発達初期の母親の就業の子どもへの影響性については海外でも大きな社会的関心が持たれてきており、発達心理学の領域を中心に多くの検証がなされている（Burchinal & Clarke-Stewart, 2007; Brooks-Gunn, Han, Waldfogel, 2010; Lucas-Thompson, Goldberg, Prause, 2010; Lombardi & Coley, 2014; 2017）。

LombardiとColey（2014）は、アメリカの代表性の高い縦断サンプル（the Early Childhood Longitudinal Study, Birth Cohort, Flanagan & West, 2004）の10,100世帯の親子について、生後9か月・2歳・4歳・5歳の4時点で測定されたデータを用いて2歳以前での母親の早期就業復帰の効果に関する分析をおこなっている。5歳時点の就学前の学力準備状況を結果変数とし、人口統計学的な属性変数や先行する子どもの気質的特徴、保育状況等の数多くの統制変数を投入した重回帰分析の結果、2歳以前での母親の就業はいずれの結果変数にも有意な関連が認められず、著者らは、“発達初期での母親の就業復帰は、現代のアメリカの子どもたちの発達的なリスクにも利点にもならないといえるのではないか”と結論している。この研究に続いて、LombardiとColey（2017）は、オーストラリアとイギリスの代表性の高い縦断データ（オーストラリア：Australia's Longitudinal Study of Australian Children Birth Cohort, 5,093世帯、イギリス：the U.K.'s Millennium Cohort Study, 18,497世帯）についても、

２歳以前での母親の早期就業復帰が小学校１年生時での知的スキル及び問題行動傾向に影響するか分析をおこない、いずれも有意な関連はみられず、母親の早期就業復帰はアメリカと同様に両国の子どもの発達的なリスクとはならない、と報告している。

日本における検討

一方、日本においては、服部と原田（1991）が生後４か月から小学校１年生までの約 2,000 人を対象とした健診を通じた縦断調査に基づいて検討をおこなっており、母親の就業と健診で測定された子どもの発達状況との間にははっきりとした相関関係は見出されず、就業の悪影響説を検証することはできなかったと報告している。著者らの縦断研究（Sugawara, 2005）においても、子どもの生後 12 年間の追跡調査のデータを用いて分析をおこなった結果、子どもが３歳以前で就業復帰したかどうかは 11 歳時点での子どもの外在化型の問題行動傾向（攻撃性や多動、反抗傾向等）や抑うつ傾向に有意な関連がなく、有意な関連を示したのは同時点（11 歳時点）での母親の精神的な不安定さであったことを見出している。野崎（2013）は、慶應義塾大学の「日本子どもパネル調査（KHPS）」のデータを用い、小学校１年生～中学３年生までの 1,161 世帯について、子どもが３歳未満時での母親の就労の影響性について検討をおこない、児童期・思春期の問題行動や向社会性、子どもの QOL、親が評価する学校の成績とは関連しなかったことを報告している。調査時に実施した学力テストとの関連では、小学生群には負の関連（就労群のほうが成績がより低い）が認められたものの、学年があがるにつれて効果量が小さくなり、中学生群では有意な関連はみられなかったこと、またどの学年でも就業群の教育費支出が非就業群より高いことから、“乳幼児期の母親の就労は、小学校低学年の成績に一時的に負の影響を与えているかもしれないが、その後教育資源の利用などによりその効果は相殺されている可能性がある”と考察している。海外に比較して研究数は少ないものの、これまでのところ３歳未満時での日本の母親の就業は、小学生時の学力と負の関連を有する可能性が示唆されているが、児童期までの子どもの問題行動の発現や社会性の発達に悪影響を及ぼすという結果は未だ報告されていない。

子どもの発達に対する役割影響理論

以上のように、発達早期での母親の就業と子どもの発達との関連については多くの相関研究がおこなわれてきたが、その関連メカニズムについては、就業による養育行動の変化を通じて子どもの発達に影響を及ぼすとする“ペアレンティング媒介モデル”と、収入増加に伴う教育投資の充実が子どもの知的発達を促進すると想定する“教育投資媒介モデル”の２つの経路モデルが提唱されてきている（Berger et al., 2005; Baum, 2003; Bernal, 2008; Brooks-Gunn et al., 2010; Lombardi & Coley, 2014 など）。学校教育が本格化する幼児期後半以降ではこの２つの経路の効果を同時に検討する必要があると考えられるが、２歳までの早期では、母親の就業はペアレンティングへの影響がより大きいと予想され、本研究では、ペアレンティングの媒介モデルについて検討をおこなうこととした。

ペアレンティングに及ぼす就業の影響性については、さらに以下の２種類の役割影響理論が構築されてきている（Barnett & Hyde, 2001; Buehler et al., 2014）。一方は、ネガティブな影響性に関する役割ストレーン理論（role strain theory, 稲葉 , 1995; Buehler et al., 2014）であり、仕事と家事・育児の多重役割の過重さから、親がストレスを抱え、ペアレンティングの劣化につながるとするものである。もう一方は、就業のポジティブな影響に関する役割拡張理論（role expansionist theory, Barnett & Hyde, 2001; Buehler et al., 2014）であり、仕事と養育の多重役割の経験は親の個人としての成長や対人関係性の健全維持につながり、ペアレンティングをより良質のものにしうると仮定する。

Buehler ら（2014）は、アメリカ国立小児保健人間発達研究所（National Institute of Child and Human Development: NICHD）の長期縦断データ（N = 1,364）を用いて、0 歳から小学校５年生までの縦断データ（測定は、生後１・６・15・24・36・54 か月目、小学校１・３・５年生時の計９時点）を対象に、この２つの仮説についての検討をおこなっている。フルタイム就業者・パートタイム就業者・無業者の３群に母親を分類し、“子どもに対するセンシティビティ”（応答の敏感さ）と、認知的・知的発達を促進する“教育機会の提供”の２側面の指標を取り上げて分析したところ、両指標ともにパートタイム就業者と無業者との間で差がみられ、パートタイム就業者のほうが有意に良質であることが示された。また、“教育機会の提供度”は幼少期についてはフルタイムのほうがパートタイムよりも有意に得点が高いことが明らかになり、総じて就業がペアレンティングの質の向上に資するとする役割拡張理論を支持する結果であったと報告している。

一般的に、子どもが母親と過ごす時間は非就業世帯のほうが多い。こうした絶対量の多寡にもかかわらず、先述のように、先行研究において母親の就業と子どもの発達との間にネガティブな関連性が見出されないのは、働く母親の養育の質が非就業の母親と同等以上に良質である可能性を想定することができるのではないだろうか。本研究では、０歳から２歳までの初産の母親を対象とした調査データ（ベネッセ次世代育成究所 , 2006; 2011, N = 3,703）の分析から、この時期での母親の就業が養育態度の良質さを媒介して子どもの行動

特徴とポジティブな関連を持つとする役割拡張理論の枠組みに沿って検証をおこなうことを目的とした。

2．方　法

分析対象

ベネッセ次世代育成研究所と“はじめてのペアレンティング研究会”による第１回および第２回妊娠出産子育て基本調査（ベネッセ次世代育成研究所，2006；2011）に参加した初産・第一子のみを持つ全国の母親3,703名のうち、就業状況が不明であった195名を除き、調査実施時点で家庭外での就業をフルタイムあるいはパートタイムでおこなっている母親738名と、無職あるいは休職中の母親2,770名の計3,508名を分析対象とした（表１）。

手続き

調査は2006年、2011年ともに郵送法によって配布・回収し、母親自身による自記式アンケートによって回答を求めた。倫理的な配慮としては、アンケートの表紙に、参加は自由であり不参加による不利益はいっさいないこと、回答したくない設問は飛ばしてよいこと、不明・疑問・意見への対応窓口を明記した上で調査票を配布し、返送によって調査の同意が得られたものとした。調査はプライヴァシー・マークを得ている調査会社によって実施された。対象地域は日本全国である。

測定尺度

・結果変数　母親の養育態度については、成人期において生育歴上の親の養育態度を回顧的に測定する尺度であるParental Bonding Instrument（PBI, Parker,1979）を現在の自分の対象児に対する態度を測定する様式に改変した尺度（菅原他，2002）より、「養育態度の温かさ」（care）に関する２項目“○○ちゃんに温かくやさしい声で話しかけている”“○○ちゃんといろいろなことを話すのを喜んでいる”を用いて測定し（評定は１.あてはまらない～５.あてはまる の５件法）、評定値の加算得点を分析に用いた（２項目の相関係数：r = .48, p < .01）。子どもの行動特徴については、「睡眠の規則性」と「統制不全性」の２つの特性について測定をおこなった。「睡眠の規則性」については、Revised Infant Temperament Questionnaire（菅原他，1994）とToddler Temperament Scale（菅原他1994）の体内リズムの規則性因子から睡眠に関する２項目“毎晩、だいたい決まった時間に眠くなる”“ベッドやお布団に入ってから眠りにつくまでの時間は一定だ”を用いて測定し（評定は１.あてはまらない ～５.あてはまるの５件法）、評定値の加算得点を分析に用いた（２項目の相関係数：r = .50, p < .01）。また、乳幼児期における萌芽的な問題行動傾向尺度（菅原他，1999）から、衝動の「統制不全性」に関する４項目“一度ぐずるとなだめにくい”“かんしゃくをおこしやすい”“ちょっとしたことで激しく泣く”“気が散りやすい”について測定し（評定は１.あてはまらない ～ ５.あてはまる の５件法）、評定値の加算得点を分析に用いた（４項目の信頼性係数：α = .71）。

・母親の就業に関する変数　アンケート調査時での就業の有無についてダミー変数
（非就業 = １／就業 = ２）を作成し、独立変数として解析に投入した。

・統制変数　基本属性として、調査年（2006年／2011年）・子どもの年齢（月齢）・子どもの性別・世帯年収を投入した。また母親の養育態度の温かさや言語的働きかけの頻度に影響することが予想される属性変数として、母親の年齢・学歴、及び夫婦の子育てをめぐる相互サポート（“私と配偶者は、○○ちゃんをどう育てるかについてよく話し合っている”“私と配偶者は、子育てや家事などの分担に関してお互いに助け合っている”等の10項目の評定値の加算得点を算出した（10項目の信頼係数α = .90、評定は、１.あてはまらない～５.あてはまるまでの５件法）。配偶者以外の子育てサポートネットワークの広さ（13のサポート資源：実父母・義父母・きょうだいや親戚・インターネットの仲間・保育士や幼稚園教諭・医師・保健師等への相談頻度の評定値の加算得点で、１.したことはない～４.いつもしている の４件法で測定）・地域のなかでの子育てサポーターの人数（地域のなかで子どもを預けられる人・子どもに声掛けしてくれる人・子育ての相談ができる人・子ども同士遊ばせて立ち話で

表１：サンプルの基本属性（*N*=3,508）

調査年，%	
2006年	49.7
2011年	50.3
子どもの年齢，%	0歳46.0／1歳32.2／2歳21.8
子どもの性別，%	
男児	53.1
女児	46.9
母親の年齢	31.6歳（*SD*=4.52, 17歳～47歳）
母親の学歴*	4.13（*SD*=1.67）
世帯年収**	5.23（*SD*=1.32）
母親の就業の有無，%	
非就業	79.0
就業	21.0
勤務形態，% (*N*=738)	
パートタイム	33.7
フルタイム	66.3

＊：学歴は、1=中卒，2=高卒，3=専門学校卒，4=高専卒，5=短大卒，6=四大卒，7=大学院卒

＊＊：世帯年収は、1.なし～11.2,000万円以上の11カテゴリで、5.は400～600万円

きる人の４項目について、１．１人もいない～４．３人以上いるの４件法で尋ね、加算得点を算出）も同時に測定を行ない、解析に投入した。

3．結 果

統計解析はIBM SPSS Statistics 24にておこなった。表１に基本属性を示したが、３歳未満時でのフルタイムとパートタイムを合わせた就業者は約２割と少なく、2006年および2011年の厚生労働省国民生活基礎調査の０歳から２歳までの末子を持つ母親の就業率の平均38.2%と比較しても、本調査に含まれる就業者の割合はさらに低い。本調査の対象を初産・第１子のみの家庭に限定していることが影響している可能性が考えられ、結果の解釈においては留意する必要がある。母親の年齢は31.6歳で、2017年の全国の第１子出産年齢の平均30.7歳にほぼ相当している。表２では、各変数について非就業群と就業群、および非就業群・フルタイム群・パートタイム群の比較をおこなった（平均値の差のt検定、および一元配置分散分析の事後検定：Duncan法）。母親の養育態度の温かさは、フルタイムとパートタイムの間で有意な得点差が見られた（フルタイム ＞ パートタイム , $p < .05$）。子どもの行動特徴については、「睡眠の規則性」では就業群のほうが非就業群より得点が高く（$p < .01$）、フルタイム群と非就業群の間にも有意差が見られた（フルタイム ＞ 非就業、$p < .05$）。「統制不全性」については群間に有意差は認められなかった。

就業の有無と母親の養育態度及び子どもの行動特徴との関連に関するパス解析

母親の就業の有無を独立変数、養育態度を媒介変数、子どもの問題行動傾向を結果変数とする重回帰分析によるパス解析をおこなった（図１および付表）。「養育の温かさ」については、弱い正の就業の効果（$\beta = .052, p < .05$）が見られ、「養育の温かさ」は子どもの「睡眠の規則性」に正の効果（$\beta = .138, p < .01$）、「統制不全性」に負の効果（$\beta = -.168, p < .01$）が見られ、弱い関連ではあるものの、就業による養育の良好さを媒介した子どもの行動特徴へのポジティブな効果を示唆する傾向が見られた。「睡眠の規則性」については「養育の温かさ」を経由しない直接の就業の効果（$\beta = .068, p < .01$）も見られ、保育所等での午睡等の生活習慣の影響性を示す結果であるとも考えられる。

4．考 察

本研究では、０歳から２歳までの第一子のみを持つ全国の母親（3,508名）を対象とした調査データを用いて、養育態度の温かさと子どもの行動特徴（「睡眠の規則性」「統制不全性」）に対する母親の早期就業復帰の効果について検討をおこなった。弱い関連ではあるものの、役割拡張理論（Barnett & Hyde, 2001; Buehler et al., 2014）が主張している養育の良質さを媒介とした子どもの行動特徴に対する就業のポジティブな関連性が示された。すなわち、“就業していること→養育の温かさのより高い傾向→子どもの睡眠の規

表２：各変数に関する非就業群・就業群の２群比較、及び非就業群・フルタイム・パートタイムの３群比較
（平均値の差の t 検定 , 及び一元配置分散分析の Duncan 法による事後検定）

	非就業群 (n=2,770)		就業群 (n=738)		フルタイム (n=249)		パートタイム (n=489)		
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	
子どもの属性									
子どもの年齢（0歳～2歳）	0.65 [a]	(0.77)	1.15	(0.74) **	1.13 [b]	(0.72)	1.18 [b]	(0.77)	
子どもの性別（男児の割合）	53.5%		50.9%		50.5%		51.8%		
母親の属性									
母親の年齢	31.62 [b]	(4.48)	31.56	(4.66)	32.14 [a]	(4.33)	30.41 [c]	(5.06)	
母親の学歴***	4.12 [b]	(1.68)	4.18	(1.66)	4.53 [a]	(1.59)	3.50 [c]	(1.57)	
世帯年収（1.無収入～11.2,000万以上）	5.21 [b]	(1.24)	5.60	(1.54) **	5.97 [a]	(1.51)	4.78 [c]	(1.26)	
ワークライフバランス評価（1.不満～4.満足）	—		2.84	(0.90)	2.72	(0.91)	3.08	(0.84) **	
母親の養育変数									
養育態度の温かさ	8.78 [a,b]	(1.23)	8.80	(1.22)	8.87 [a]	(1.16)	8.67 [b]	(1.33)	
ソーシャルサポート									
夫婦の子育て相互サポート	33.93	(7.44)	33.61	(8.11)	33.77	(8.07)	33.28	(8.21)	
配偶者以外のサポートネットワーク	25.44	(4.55)	25.70	(4.60)	25.79	(4.57)	25.54	(4.65)	
近隣の子育てサポート	10.03 [b]	(3.65)	9.65	(3.71) *	9.46 [a]	(3.73)	10.03 [b]	(3.66)	
子どもの行動特徴									
睡眠の規則性	7.19 [a]	(2.07)	7.47	(1.89) **	7.54 [b]	(1.85)	7.33	(1.95)	
統制不全性	10.26	(4.08)	10.55	(3.89)	10.61	(3.80)	10.42	(4.07)	

注）＊：$p < .05$, ＊＊：$p < .01$　就業群と非就業群の間に有意差があることを示す。
非就業群とフルタイム、パートタイムの間の差については、a, b, c間でそれぞれ5%水準での有意差があることを示している。
ワークライフバランス評価に関するフルタイム、パートタイムの間の差については、＊＊：$p < .01$で有意な差がみられた。

＊＊＊：1=中卒, 2=高卒, 3=専門学校卒, 4=高専卒, 5=短大卒, 6=四大卒, 7=大学院卒

則正しさ及び衝動のより高い統制傾向”という流れを想定可能な結果であったといえる。役割拡張理論が示唆している職業人としての役割と親役割の多重役割が個人としての成長や対人関係性の健全維持につながり、ペアレンティングをより良質なものにしうる可能性があるとともに、家庭での限られた時間内での子どもへのかかわりを、より良いものにしようと努める意識が就業群に働いていることも理由としてあげることができるかもしれない。就業する親の役割意識や対人関係性、子どもの養育に対する意識や行動の特徴について、今後より詳細な検討が必要であろう。また、母親の養育の良質さには、夫婦の相互サポートや配偶者以外のサポートネットワークの幅広さ、近隣の子育てサポートの手厚さがポジティブな効果を持つことが示されたことも重要な知見である。共働き世帯・片働き世帯にかかわらず、ともに子育て支援が必要であることを示す結果であるといえよう。

前述のように、本サンプル中の母親の就業率が国民生活基礎調査の統計よりも低いことや、サンプリングの時期が 2006 年・2011 年とやや古いこと、また母親の自己報告法を用いていて客観性を担保できていない点といった限界性を踏まえ、役割拡張理論の妥当性を確認するためには、より代表性の高いサンプルによる縦断的なデザインによる研究が必要である。また、今回の解析モデルはいずれも有意ではあったものの説明率が低く（調整済み決定係数 = .06 〜 .09, いずれも $p < .01$）、今後父親の養育も含めて検討することが求められる。

働き方改革の進展による育児休業や育児時間の取得拡大、各種の手当て等の子育て支援制度の充実が図られてきているものの、日本では３歳児神話は未だ根強く社会的に機能していて、幼い子どもを持つ母親の就業継続の抑制要因であり続けている。３歳児神話の克服に向けては、親の多様な就業スタイルに適合的であると同時に子どもの発達にとって良い影響を及ぼし得る家庭内外の養育・保育環境のあり方の工夫が必要であり、どのようなあり方が望ましいのか、実証的な研究が今後ますます重要になると予想される。

〈引用文献〉

Barnett, R. C. & Hyde, J. S.（2001）Women, men, work, and family: An expansionist theory. *American Psychologist*, 56（10）, 781-796.

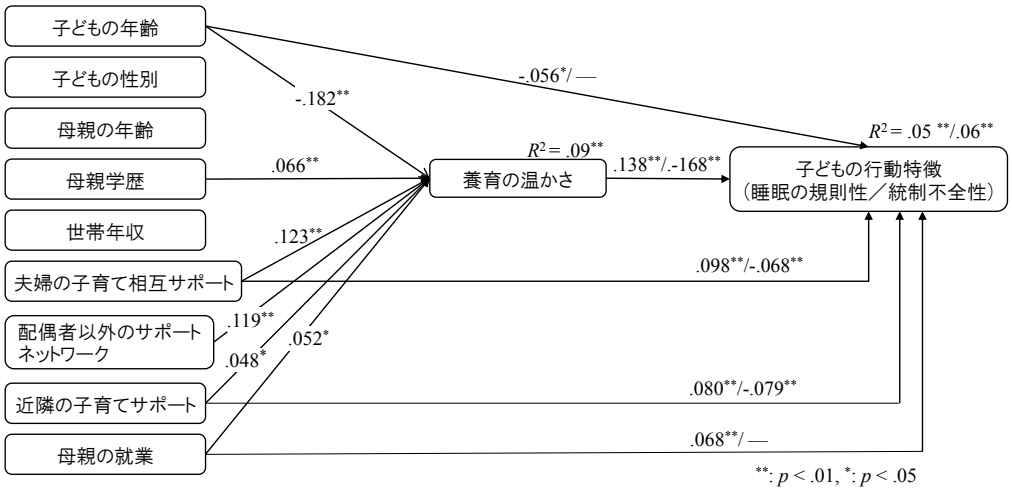
Baum, C. L.（2003）Does early maternal employment harm child development? An analysis of the potential benefits of leave taking. *Journal of Labor Economics*, 21, 409–448.

Bernal, R.（2008）The effect of maternal employment and child care on children's cognitive development. *International Economic Review*, 49（4）, 1173-1209.

ベネッセ次世代育成研究所（2006）第１回 妊娠出産子育て基本調査報告書 . ベネッセ教育総合研究所 . https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3319

ベネッセ次世代育成研究所（2011）第２回 妊娠出産子育て基本調査報告書 . ベネッセ教育総合研究所 . https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3316

Berger, L. M., Hill, J., & Waldfogel, J.（2005）Maternity leave, early maternal employment and child health and development in the US. *Economic Journal*, 115, F29–F47. doi:10.1111/j.0013-0133.2005.00971.x



注1）調査年（2006/2011）は統制済み。子どもの性別は、1=男児／2=女児、母親の就業は、1=非就業／2=就業で、就業しているほうが養育の温かさの得点が有意に高いことを示す。

注2）有意水準あるいは有意傾向に達しなかったパスは省略している。

注3）各パス係数は、左側の数値が睡眠の規則性、右側の数値が統制不全性を表している。

図1：母親の就業と養育態度、子どもの行動特徴（睡眠の規則性と統制不全性）との関連：パス解析

Brooks-Gunn, J., Wen-Jui, H. & Waldfogel, J.（2010）First-year maternal employment and child development in the first seven years. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 75（2）, 1-113.

Buehler, C., O' Brien, M., Swartout, K. M. & Zhou, N.（2014）Maternal employment and parenting through middle childhood: Contextualizing factors. *Journal of Marriage and Family*, 76（5）, 1025-1046.

Burchinal, M. R. and Clarke-Stewart, K. A.（2007）Maternal employment and child cognitive outcomes: The importance of analytic approach, *Developmental Psychology*, 43（5）, 1140-1155.

Flanagan, K., & West, J.（2004）Children born in 2001: First results from the base year of the Early Childhood Longitudinal Study, Birth Cohort（ECLS–B）（NCES 2005-036）. Washington, DC: National Center for Education Statistics.

服部祥子・原田正文（1991）『乳幼児の心身発達と環境 大阪レポートと精神医学的視点』名古屋大学出版会 .

稲葉昭英（1995）性差、役割ストレーン、心理的ディストレス－性差と社会的ストレスの構造－ .『家族社会学研究』No.7, 93-104.

柏女霊峰（2008）第２講　児童の発達と児童福祉 『現代児童福祉論第８版』, 誠信書房 , pp13-pp23.

厚生労働省（2019）平成 30 年度の国民生活基礎調査 . https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa18/index.html

Lombardi, C. M. & Coley, R. L.（2014）Early Maternal Employment and Children's School Readiness in Contemporary Families, *Developmental Psychology*, 50, 2071–2084.

Lombardi, C. M. & Coley, R. L.（2017）Early Maternal Employment and Children's Academic and Behavioral Skills in Australia and the United Kingdom, *Child Development*, 88, 263–281.

Lucas-Thompson, R. G., Goldberg, W. A. & Prause, J.（2010）Maternal work early in the lives of children and its distal associations with achievement and behavior problems: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 136（6）, 915-942.

日本政府（2014）,『日本再興戦略』改訂 2014―未来への挑戦―　官邸 . http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/honbun2JP.pdf36）

野崎華世（2013） JOINT RESEARCH CENTER FOR PANEL STUDIES DISCUSSION PAPER SERIES DP2012-010 March, 乳幼児期における母親の就業が子どもの成長に与える影響. https://www.pdrc.keio.ac.jp/publications/dp/1138/

Parker, G.（1979）Parental characteristics in relation to depressive disorders. *British Journal of Psychiatry*, 134, 138-147.

労働政策研究・研修機構（2017）子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査 2016（第 4 回子育て世帯全国調査）. JILPT 調査シリーズ No.175.

菅原ますみ・島 悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則（1994）乳幼児期にみられる行動特徴：日本語版 RITQ および TTS の検討 . 教育心理学研究，42，315 － 323.

菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島 悟・佐藤達哉・向井隆代（1999）子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から，発達心理学研究，10（1），32-45.

菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則（2002）夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連－家族機能および両親の養育態度を媒介として－. 教育心理学研究，2002, 50, 129-140.

Sugawara, M.（2005），Maternal employment and child development in Japan: A twelve-year longitudinal study." In Schwalb, D.W., Nakazawa, J., & Schwalb, B.J.（eds.），Applied Developmental Psychology: Theory, Practice, and research from Japan. 225-240, 2005 A Volume in Advances in Applied Developmental Psychology Series. IAP: Connecticut.

竹沢純子（2019）仕事と育児の両立に関する国際比較 . 季刊個人金融 2019 冬 , 36-45.

謝 辞

本研究は、故小林登氏による“はじめてのペアレンティング研究会”において実施された。小林登氏のご冥福を心よりお祈りするとともに、共同研究者の田村徳子氏、また調査にご協力いただいた多くのご家庭に深く感謝する。

付表：養育の温かさを媒介とした子どもの行動特徴（睡眠の規則性・統制不全性）と母親の早期就業の有無との関連（重回帰分析によるパス解析）

	養育の温かさ		睡眠の規則性		統制不全性	
	β	*SE*	β	*SE*	β	*SE*
調査年（0=2006年/1=2011年）	-.035	(0.05)	-.094 **	(0.08)	-.058 **	(0.16)
子どもの年齢	-.182 **	(0.03)	-.056 *	(0.06)	.035	(0.11)
子どもの性別（1=男児/2=女児）	.026	(0.05)	.006	(0.08)	-.003	(0.16)
母親の年齢	-.009	(0.01)	.017	(0.01)	-.016	(0.02)
母親の学歴	.066 **	(0.02)	-.030	(0.03)	-.004	(0.05)
世帯年収	.011	(0.02)	.017	(0.03)	-.026	(0.07)
夫婦の子育て相互サポート	.123 **	(0.00)	.098 **	(0.01)	-.068 **	(0.01)
配偶者以外のサポートネットワーク	.119 **	(0.01)	-.023	(0.01)	-.005	(0.02)
近隣の子育てサポート	.048 *	(0.01)	.080 **	(0.01)	-.079 **	(0.02)
母親の就業の有無（1=非就業/2=就業）	.052 *	(0.06)	.068 **	(0.10)	.024	(0.21)
養育の温かさ	―		.138 **	(0.03)	-.168 **	(0.07)
$adjR^2$	.09**		.06**		.05**	

＊：$p < .05$, ＊＊：$p < .01$

日本子ども学会 NEWS

第17回 子ども学会議（学術集会）のお知らせ

テーマ

子どもらしさって、なあに？ ぼくらしさ・わたしらしさを知っている？

―身体に不自由のある子どもたちの支援を通して発達とは何かを考える―

第17回子ども学会議は、滋賀県立大学にて開催されます。会議を企画・運営する「びわこ学園医療福祉センター草津」は1963年に日本で2番目に設立された重症心身障害児（者）施設で、今年で57年目を迎えます。びわこ学園の創設に尽力された糸賀一雄は「この子らを世の光に」という言葉を残しており、これは「この子らに世の光を」という慈悲の言葉ではなく、この子らこそが光り輝く光そのものであることを意味しています。

本学術会議のテーマは、「子どもらしさって、なあに？　ぼくらしさ・わたしらしさを知っている？」―身体に不自由のある子どもたちの支援を通して発達とは何かを考える―です。

それぞれ異なった子どもらしさを持っている子どもたちが、それぞれに光り輝くために、私たち大人は何ができるでしょうか？ 会議では身体に不自由のある子どもたちの生活世界を視座に置きながら、子どもたちの発達をどのように捉え、支援していくのかを考えてみたいと思います。

【日時】2020年10月24日（土）・25日（日）
【会場】滋賀県立大学

ポスター演題募集!!
詳しくは日本子ども学会のHPをご覧ください

- 参加費（事前登録）：学会員4,000円、一般5,000円、学生3,000円（ポスター発表）、懇親会費5,000円
  （当日）：学会員5,000円、一般6,000円、学生1,000円（高校生以下無料）、懇親会費6,000円
- 大会長：高塩純一（びわこ学園医療福祉センター草津）
- 大会準備委員長：安田寿彦（滋賀県立大学工学部教授）
- 後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、彦根市、彦根市教育委員会、一般社団法人 滋賀県医師会、社会福祉法人 びわこ学園、公益財団法人 滋賀県理学療法士会、一般社団法人 滋賀県作業療法士会、公益財団法人 ダイトロン福祉財団
- 協賛：滋賀県立大学工学部 情報応用サロン

第17回 子ども学会議　プログラム（予定）

第1日 10月24日（土）

10:00～ 開会式
10:10～ 大会長講演「障害のある子どもたちへのPlayful Approach」
高塩純一（大会委員長・びわこ学園医療福祉センター草津）
11:00～ 教育講演「福祉の思想」 渡部昭男（元神戸大学発達科学部教授）　司会：口分田政夫（びわこ学園医療福祉センター草津施設長）
12:00～ 昼休み／理事会／会員総会
13:00～ シンポジウム「子どもと環境をどのようにつなぐのか」
鯨岡　峻（京都大学名誉教授）、細田直哉（聖隷クリストファー大学准教授）、
天田美恵（滋賀県立小児保健医療センター作業療法士）、山口和也（社会福祉法人ウイング）、
桐山伸也（静岡大学情報学部准教授）　司会：岸本　眞（宝塚医療大学和歌山保健医療学部教授）
16:00～ ポスターセッション
18:15～ イブニング・セッション／ポスター発表優秀賞表彰式

第2日 10月25日（日）

9:00～ 特別講演　「Driving to Learn」　*通訳あり
Lisbeth Nilsson（Lund大学准教授）　司会：奥田憲一（九州栄養福祉大学教授）
10:40～ パネルディスカッション「早期電動移動機器使用が子どもたちの発達に及ぼす影響
西島和秀（聖ヨゼフ園作業療法士）、篠原　勇（与謝の海支援学校教諭）、安田寿彦（滋賀県立大学工学部教授）、
濱田知加（当事者の親として・保健師）　コーディネーター：船橋篤彦（広島大学大学院講師）　コメンテーター：Lisbeth Nilsson
10:40～ 自主シンポジウム
12:00～ 昼休み　／　12:15～14:30　ホワイエ遊☆viva in 彦根
13:00～ 市民公開講座　クロストーク「殺す親 殺させられる親―重い障害のある人の親とともに考える施設福祉と地域移行」
児玉真美（日本ケアラー連盟代表理事）、木下　真（福祉ジャーナリスト・日本子ども学会事務局長）
14:40～ 市民公開講座「子どもたちからのSOS」　悠々ホルン　司会：松嶋秀明（滋賀県立大学教授）
16:00～ 「これからの障害児支援を考える」　榊原洋一（日本子ども学会理事長・お茶の水女子大学名誉教授）
16:30～ 閉会式

（詳細は、日本子ども学会のHPでご案内します）

投稿論文
募集！

チャイルド・サイエンス 投稿論文部門 原稿募集について

投稿種別

投稿者は投稿時に論文の種別（下記参照）を選択し明示してください。なお、査読の過程で、論文内容に即して種別の変更をお勧めすることがあります。

- **研究論文**
  いずれかの研究領域の理論と方法を背景としつつ、子どもに関する学際的な問題について研究した成果をまとめたもの。
- **研究ノート**
  子どもをめぐる様々な事実や状況を検討して研究の課題を提示したり、子ども学として確立していくべき研究の方向性を示したりする萌芽的な研究や展望、提言など。

査読体制

◉ 論文の投稿は随時受け付けます。
◉ 投稿論文の採否は、編集委員会の議を経て依頼された査読者２名と編集委員（長）の合計３名による審査によって決定します。査読者のうち１名は原則として投稿された論文の研究領域（または最も近いと判断される領域）の研究者とし、もう１名は研究領域にこだわらずに選ばれます。
◉ 査読者および編集委員（長）は、投稿論文とそのもとになった研究をよりよいものにしていくという観点から、書面によってコメントします。特に修正のコメントがない場合を除き、コメントを付していったん投稿者に返却し、論文の修正をお願いします。
◉ 修正・再提出された論文に対して査読者および編集委員（長）は同様の手続きを行い、採択・不採択を合議によって決定します。
◉ 採択・不採択にかかわらず、コメントは再び投稿者に返却されますので、今後の研究に生かしてください。また不採択の場合でも、修正の上、次年度以降の号で再投稿することができます。

以上の過程は投稿者・査読者ともに匿名で行います。なお、査読者については『チャイルド・サイエンス』に氏名の一覧を掲載します。また、採択された論文はその時点で編集中の直近の号に収録します。

◉【著作権】本誌に掲載された論文の著作権は日本子ども学会に帰属しますので、掲載論文を無断で複製および転載することを禁じます。所属機関リポジトリ等への掲載を希望される場合は、編集委員会にご相談ください。

執筆要項

①投稿者は、研究を進めるにあたって、倫理的問題に十分配慮することが求められます。
②会員、非会員を問わず投稿できます。
③「研究論文」は 10000 字以内かつ刷り上がり５ページ以内、「研究ノート」は 8000 字以内かつ刷り上がり４ページ以内とします。図表等もこの範囲に収めてください。
④原稿はワードプロセッサで作成し、投稿は電子ファイルを添付して、編集部宛にメールで送信してください。
⑤本文とは別に表紙を作成してください。表紙には論文タイトル、筆頭著者・共同著者の氏名、所属および職名、連絡先（住所・電話・メールアドレス）、および「研究論文」「研究ノート」の別を明記します。表紙の様式は下記ホームページからダウンロードしてください。また、本文にはタイトルのみを明記し、氏名等は記入しないでください。本文には 500 字以内の和文要約、および５項目以内のキーワードを付けてください。
⑥図表の描き方、引用文献、注の付け方などはそれぞれの領域の原則に従います。それがない場合は、以下の諸点に注意して作成してください。
⑴図表は別紙に書き、図１、表１のように通し番号を付けます。
⑵表の題はその上部に、図等の題は下部に、説明文はいずれも下部に書くこととします。
⑶引用文献は、論文の最後に著者名のアルファベット順に一括して挙げてください。
⑷引用文献は、著者名・発行年・題目・発行所の順に記述します。
⑸注は通し番号を付け、別紙に記載します。本文中にはそれに対する番号を付してください。

★詳細情報はこちらに掲載します

日本子ども学会ホームページ
http://www.blog.crn.or.jp/kodomogaku/

「事務局」だより

昨年は、日本子ども学会の理事であり、日本赤ちゃん学会の理事長である小西行郎先生が9月にお亡くなりになったのに続けて、年末には日本子ども学会の名誉理事長である小林登先生もお亡くなりになりました。子どもを学際的に研究しようとする二つの学会を代表する重要な先生方を失うという悲しい出来事が重なりました。日本子ども学会が日本学術会議協力学術研究団体の指定団体となるなど、学会がさらに新たなステップへと踏み出していく姿を見ていただきたかっただけにとても残念です。今年度の10月に開催される滋賀県立大学での学術集会では、小林登先生をしのぶコーナーを設けることも予定しています。

2019年度の会員数は、正会員が574名、学生会員が28名、賛助会員が17社／団体、総計619名になります（2019年9月末日）。学生会員の資格が2年間となり、退会する学生が例年よりも多く、昨年度の645名を下回ることになりましたが、正会員が増加傾向にあることは変わりなく、今後も会員数は順次増加していくものと期待されます。小林登先生の思いを継いでいく仲間を、今後も大切にしていきたいと思います。　（木下 真・所 真里子）

委員会だより

◉財務委員会

2019年度は、大会の補助が若干必要でしたが、収支としては問題なく収まる見込みです。会費の滞納者に対する対応とともに、日本学術会議の登録団体になったこともあり、学会誌への投稿を促す取り組みで、学会員の増加を目指す予定です。支出では、学会誌の年2号発行を継続して行うことができ、その他の支出は抑えることができているので、若手の新規活動にも支援ができればと思っています。

今後も日本子ども学会が、様々な分野や世代に広がるよう、支えていければと願っています。引き続き、皆様方の温かいご支援をお願いいたします。（小林美由紀）

◉広報委員会

久しぶりにNHK Eテレ「おかあさんといっしょ」「みいつけた!」「にほんごであそぼ」を視聴しました。子どもたちが、どのような楽しみや遊びをしているのか、改めて考えて見ました。子どもにとってパジャマとは～。幼児がはにかみながら、時に不安な表情で自分なりのやり方でパジャマを着てみる。それを見ているほかの幼児も、自分もやりたくなりますよね。パジャマを着るというプロセスの中に前、後がある。開いている穴に片方ずつ手や足を通す。右手と左手を連携させてボタンをとめる。子どもがパジャマを着るという行為から子育てのさまざまな視点が見えてきます。

メディアにおける“子ども”だけでなく、内閣府にも支援新制度が作られ、子ども・子育て本部も設置されています。日本子ども学会としても、さまざまな形で他分野の活動に関わる方向を探りたいですね。

（一色伸夫）

◉研究開発委員会

2019年度は第10回子ども学カフェとして、日本の貧困問題に取り組む社会活動家、湯浅誠先生に「こども食堂の現状とその意味と価値」と題する講演を、2019年4月20日（土）慶應義塾大学三田キャンパスで行いました。これは本年度の子ども学会議のテーマが「友だち」であったことから、子どもが集い友だちを作る場であり、なおかつ今日の子どもが直面する重大な社会問題である貧困を解決する場でもあるこども食堂を取り上げようという趣旨からでした。湯浅氏の分厚い経験に裏打ちされた明快な議論は、単に子どもの貧困の問題だけでなく地域活性化の問題にまで踏み込んだ奥の深いものとなり、カフェに集った40人あまりの参加者との熱のこもった議論が展開されました。

なお、昨年度より懸案の為末大氏と本学会理事と共同の出版計画はまだ検討中です。　（安藤寿康）

◉編集委員会

2019年度は、日本子ども学会にとって大きな出来事がたくさんあった年でした。最も大きな、そして悲しい出来事は、学会の設立者で名誉理事長の小林登先生のご逝去です。また、小林先生とご一緒に子ども学会の創設期にご尽力いただいた小西行郎先生も旅立たれました。心細い思いですが、お二人が天国から「そろそろ独り立ちしなさい」と言っておられるような気もします。

嬉しい出来事は、子ども学会が日本学術会議の協力学術研究団体に認定されたことです。これで論文投稿、とくに大学院生からの投稿の増加が見込まれます。

そして、さらに投稿しやすくするために、非学会員でも投稿ができるように投稿規定の変更も行いました。査読や編集の仕事が増えるかもしれませんが、皆様のご協力をよろしくお願いします。（榊原洋一）

「日本子ども学会」は、会員を募集中です。

■日本子ども学会についての詳しい内容は、当学会のホームページをご覧ください。（入会申込書もダウンロードできます）

http://www.blog.crn.or.jp/kodomogaku/

■年会費

正 会 員／ 5,000 円
学生会員／ 3,000 円
賛助会員／ 30,000 円

■入会・会員登録に関するお問い合わせ先

「日本子ども学会 事務局」

〒162-0801　東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター（担当：篠原）
Tel.03（6824）9370　Fax.03（5227）8631
E-mail:kodomo-post@bunken.co.jp

日本子ども学会
役員・理事のご紹介

■ **理事長**

榊原洋一（お茶の水女子大学名誉教授）

■ **副理事長**

安藤寿康（慶應義塾大学教授）　＊研究・開発委員長兼務
太田美代（社団法人 環境政策対話研究所理事）

■ **事務局長**

木下　真（木下編集事務所）

■ **常任理事**

一色伸夫（こどもメディア研究所 所長）　＊広報委員長兼務
小林美由紀（白梅学園大学子ども学部教授、小児科医）　＊財務委員長兼務
沢井佳子（チャイルド・ラボ 所長）
菅原ますみ（お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系教授）　＊編集委員長兼務
所　真里子（NPO法人 保育の安全研究・教育センター理事）　＊事務局長補佐兼務
仁木和久（お茶の水女子大学客員研究員、産業技術総合研究所客員研究員）　＊会員・規約委員長兼務
宮下孝広（白百合女子大学人間総合学部教授・副学長）
劉　愛萍（チャイルド・リサーチ・ネット）
渡辺富夫（岡山県立大学情報工学部教授・副学長）

■ **理事**

朝倉民枝（株式会社グッド・グリーフ代表取締役）
浅田　稔（大阪大学先導的学際研究機構）
安西祐一郎（慶應義塾大学名誉教授）
石渡正志（甲南女子大学教授）
井上高光（さつき幼稚園理事長）
内田伸子（十文字学園女子大学特任教授）
内田ふみ子（子ども大学よこはま事務局）
遠藤利彦（東京大学大学院教育学研究科教授）
大橋節子（学校法人 創志学園副理事長、環太平洋大学学長）
長田有子（NPO法人 チャイルド・ケアリング・アソシエーション理事）
河合優年（武庫川女子大学教授）
桐山伸也（静岡大学学術院情報学領域准教授）
坂上浩子（ＮＨＫエデュケーショナル取締役）
酒井　厚（首都大学東京都市教養学部准教授）
佐倉　統（東京大学大学院情報学環教授）
佐々木玲子（慶應義塾大学体育研究所教授）
佐藤朝美（愛知淑徳大学人間情報学部准教授）
志村洋子（埼玉大学名誉教授）
瀬尾知子（秋田大学教育文化学部こども発達・特別支援講座准教授）
竹下秀子（追手門学院大学心理学部教授）
高塩純一（びわこ学園医療福祉センター草津 理学療法士）
竹林洋一（静岡大学創造科学技術大学院特任教授）
塘　利枝子（同志社女子大学教授）
中井昭夫（武庫川女子大学 大学院臨床教育学研究科・子ども発達科学研究センター教授）
服部　弘（ＮＨＫエデュケーショナル）
原島　博（東京大学名誉教授）
開　一夫（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻教授）
眞榮城和美（白百合女子大学人間総合学部准教授）
松沢哲郎（京都大学高等研究院特別教授、京都大学霊長類研究所兼任教授）
渡部　茂（明海大学保健医療学部教授）

〈50音順、2020年3月現在〉

■ **監事**

安倍嘉人（弁護士、公益社団法人家庭問題情報センター理事長）

■ **顧問**

箕浦康子（お茶の水女子大学名誉教授）

チャイルド・サイエンス Vol.19

発 行 日：2020年3月31日
発　　行：日本子ども学会
　　http://www.blog.crn.or.jp/kodomogaku/
編　　集：日本子ども学会　編集委員会
　　（菅原ますみ、太田美代、大橋節子、木下真、
　　榊原洋一、佐藤朝美、志村洋子、眞榮城和美、
　　宮下孝広、渡辺富夫）
編集協力：木下編集事務所
　　株式会社インタレスト
デザイン：シモサコグラフィック
印刷・製本：株式会社総北海
ISBN978-4-909336-05-7

CHILD RESEARCH NET

子ども学、アジア全域へ

CRNアジア子ども学研究ネットワーク（CRNA）活動中

近年、急速な発展を遂げているアジア。
子どもを取り巻く環境も日々変化し、様々な問題を抱えています。
CRNでは、アジアの子どもを取り巻く諸問題の解決の糸口を探るために
「CRNアジア子ども学研究ネットワーク」を展開し、
アジア各国を代表する子ども研究の専門家のネットワークを構築しています。

https://www.crn.or.jp/

※これまでの東アジアでの活動も、こちらからご確認いただけます。

子どもに関心をおもちの方ならどなたでもアクセスしていただきたい。CRNは日本国内のみならず、グローバルな視点で子どものことを研究していくためのインターナショナルな「場（arena）」を提供してゆきたいと思います。是非有効にご活用ください。

CRN所長　榊原洋一

子どもたちの
笑顔のために、
学際的な視点から
活動しています

子どもは未来である

チャイルド・リサーチ・ネット
「子ども学」研究所

CHILD RESEARCH NET
We are a non-profit organization in Japan devoted to thinking with and about children

https://www.facebook.com/crn.jp
https://twitter.com/crn_jp

“子ども”に関心をおもちの方は、今すぐ CRN 検索

日本子ども学会

〒162-0801
東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター
Tel.03(6824)9370
Fax.03(5227)8631
e-mail:kodomo-post@bunken.co.jp

ISBN978-4-909336-05-7

頒布価格：本体 1500 円